九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

翻訳・フロイス「日本史」3部1～4章

服部，英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門歴史資料情報講座

曽田，菜穂美

https://doi.org/10.15017/1456058

出版情報：比較社会文化. 20, pp.31-52, 2014-03-25. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第20号（2014）31～52
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.20（2014），pp. 31～52

翻 訳

翻訳・フロイス『日本史』3部1～4章

服部　英雄[解説]・曽田菜穂美[訳と解説]

宣教師フロイスは戦国時代に来日し、九州から京都まで日本の各地で暮らし、多くの民衆と接し、また織田信長や豊臣秀吉にも面会している。『日本史』は、フロイスによってかれの手もとにあった書簡や、報告書をもとに編纂叙述された。1977～80年に松田毅一・川崎桃太によって全巻が翻訳されて、日本史研究に不可欠の書となった（中央公論社）。それまでの日本側史料には記述のない多くの事実が記されていたからである。

フロイス自身のペンによる『日本史』の原本は19世紀にマカオで焼失してしまい、今は世界各地に残された写本にたよるしかないが、現在では叙述された1549から1593年までの全ての写本が見つかっている。時代によっては複数の写本がある。複数の写本間には当然のように差異がある。松田毅一・川崎桃太両氏が依拠した写本は現在、大村市立史料館に松田毅一南蛮文庫として複写版が保存されている。

それまで『日本史（Historia de Iapam）』ポルトガル語の刊本は、第２部のみが刊行されていた。João do Amaral Abranches Pintoと岡本良知による“Segunda parte da Historia de Japam”1938年である。ほかにドイツ語版“Die Geschichte Japans”1926年があって、G. Schurhammer, E. A. Voretzsch氏によって第一部のみが刊行された。

（以下は曽田菜穂美氏のご教示による。）

リスボン国立図書館から“Historia de Japam”全５冊が刊行されたのは1976~84年であった。校訂者脚注をつけた「日本史」校訂版を出版するというのは、José Wicki氏、当時のリスボン国立図書館長マヌエル・エステヴァン氏とポルトガル海外史研究所所長シルヴァ・レーゴ氏の発案によっていて、資金は国立図書館が負担した。発行地のリスボンはフロイスの生地で、今後「日本史」が再び散逸することのないようにとの思いから発行にいたった、とのことである。

リスボン国立図書館本は、アジュダ図書館写本（49-IV-54）（49-IV-57）・国立図書館写本（9448）（177360）（177 361）・海外史文書館写本（1659）の計６つの写本のすべてをもとに、失われた原典ーフロイス「日本史」ーの復元を試みる校訂版で、特定の写本の復元ではない。伝承過程での明らかな誤り（誤写や脱落等フロイスの原文からのずれ）には、校訂者注を入れ、同年代に２つの写本が存在している場合（1566年-1582年）（1589年-1594年）には、双方を比較することでより客観的に原本に近づこうとした。

最初はWick氏による刊行が松田川崎翻訳作業よりも先行していたが、のちに逆転、追い抜かれた。日本語版の方が先に翻訳が完成した。この日本とポルトガルにて行われた二つの仕事は、当初は協業関係にあったらしいが、ある段階からは別々に進められることになった。

服部はポルトガル語に通じてはいないが、“Historia de Japam”を読む勉強会にて、ブラジル人留学生ナシメント氏に翻訳してもらう機会があった。たまたま読んだ最終章（Ｖ巻80章）の場合、松田川崎訳とかなりの差異があることに気づいた。そしてその差異は松田川崎訳が依拠した写本とリスボン国立図書館の元本との差にあるのではないかと考え、点検した結果、両者に若干の異なりがあることがわかったので、「フロイス『日本史』Ｖ部80章：松田毅一・川崎桃太翻訳の検証」としてQIRに電子掲載した。
http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac/repository/100000/handle/2324/18350/Frois%28%E4%BF%AE%E6%AD%A32011.10.17%29.pdf

今回曽田菜穂美氏の翻訳によって、Ｖ巻１～４章を紹介するが、松田・川崎日本グループの翻訳とWicki氏による復刻・校訂の方法・方針に若干の差異があるらしいこともわかった。複数の写本がある場合、どれかひとつの写本に依拠しつつ、問題箇所を指摘しておく方法と、複数写本を比較検討して、適宜写し誤りを推定・是正しながら、より妥当な原文を推定して校訂していく方法とがある。いずれでも校訂者は自身で変更した箇所は、注記によって示しておく必要がある。両方の方法は厳密に

は異なる別個のものではなく、双方の手法を取り入れることがふつうだ。ただどちらかといえば松田・川崎日本グループは前者の方法に近く、Wickiグループは後者の方法に近かった。

松田訳が依拠した写本はその凡例にもあるが、年代別に示せば

年代

1549-1578 アジュダ図書館写本（49-IV-54）
1578-1583 海外史文書館写本（1659）
1583-1587 国立図書館写本（177360）（松田氏によれば11098）
1588-1594 アジュダ図書館写本（49-IV-57）
（カッコ内は写本番号）

である。国立図書館写本は国立図書館が所蔵する写本の意味である。

上記のほかに
1566年-1582年にあたる国立図書館写本（9448）
1588年-1594年にあたる国立図書館写本（177361）
がある。

Wicki版序文によれば　同年代をカバーする国立図書館写本（9448）と、他の写本（49-IV-54や1659）を較べると、9448には他写本に欠けている単語や行が残されていたり、他写本より精度の高い部分がある。他の観点から総合的に判断しても、より古い写本であると考えられる。そして科学的で信頼のおける、より完全な校訂版のためにはこの9448を参考にする必要があるとWicki氏は考えている。

Wicki版序文の研究史に
（松田毅一氏は）「日本史」の写本のすべてについて知ってはいるようだが、国立図書館所蔵の写本（9448）についてはどう理解しているか不明だ。
とある。松田・川崎は翻訳にあたっては9448を参照しなかったと思われる。

松田毅一氏は1921年生まれ、川崎桃太氏は1915年生まれだった。1975年には川崎氏は60歳、松田氏は50歳半ばであったから、年令からすれば、以後新たに膨大で困難が想定される仕事に着手することには、当然に躊躇があった。しかし松田・川崎にはその懸念よりも、遥かに強い使命感があった。そして同時に焦燥感もあった。すでに中公新書『回想の織田信長』（1973）、『秀吉と文禄の役』（1974）での部分的紹介があって、日本の読者は、フロイス『日本史』の全文翻訳を切望していた。まったく未知の世界がそこには広がっており、日本歴史が書き改められることは必至だった。日本人が世界中で『日本史』にもっとも関心を持っていたことは当然である。

松田氏は9448および177361を参照できなかった。入手できなかったようだ。理由は不明だが、訳者序文に
１）写本入手は困難で、やっと1975年に入手ができた。２）テキストは手写本である。３）写本は2500頁におよび、膨大である。４）地名人名の比定が容易ではない、と述べたのちに
「日欧の史家が協力して、まず覆刻版を出し、ついで邦訳するのが望ましく思われた。訳者はそれを期待して来たし、またそうした話もなくはなかったが、具体化せぬまま今に至ったのである。西欧において「日本史」の全覆刻版が刊行されることを耳にしてすでに久しいが、いまだに刊行されぬので、訳者両名は協議し、いずれ原語版が世に出ることを期待しつつ開板することにした次第である。」
としている。1975年になってやっと全ての年代をカバーする写本４つを入手した。自身の年令と日本読者の期待を考えれば、これ以上待つことはできないし、必要もなかった。翻訳が完成しないことも想定して、（ドイツ語訳からの重訳とはいえ）すでに日本語訳がある第一部はあとまわしとして、第二部から翻訳を開始した。両氏による日本語訳の構成が、「豊臣秀吉編」「五畿内編」「豊後編」「西九州編」となっている。原文の叙述とはまったく無関係で、時系列が地理・地域別になった。リスボン国立図書館本を手にしたものには奇異な感じがする。しかしこうした背景があった。今回紹介する４章分のうち108章、109章（リスボン本１、２章）が中央公論本では11巻（西九州編Ⅲ）、110章（３章）が２巻（豊臣秀吉Ⅱ）、111章（４章）が５巻（五畿内編Ⅲ）に分割掲載となっている。また松田本は1590年から終わりまでを第３部としているが、この構成はリスボン国立図書館本（全５巻）構成からは読みとれない。

Wicki氏が疑問とした点は、日本側の強い希望を考えれば理解できる。松田・川崎両氏の姿勢は社会的要請に対し緊急に答えていくという学者の基本姿勢に立つ当然のもので良心的であった。しかし一部に課題が残ることにはなっている。

なお他にも、松田氏はフロイスが1592年から1595年マカオに滞在して日本に戻る際に、日本史の原稿も日本に持ち帰ったと考えていたようだが、Wicki氏は原稿がマカオに残され、フロイスはマカオで「日本史」の執筆を終わらせたと考えている。

今回の1588年の記述では松田川崎が使用できなかった177361が反映されることになる。

以下松田川崎訳の翻訳上の違いの例を具体的に挙げる（括弧内はページ数）。

●１章

▲ドン・ジェロニモはすでに神のもとに召されたドン・アントニオの嫡子で、かの地におけるキリシタンの長であり‥‥の箇所

...recado de Dom Geronimo, filho herdeiro de Dom Antonio que Deos tem, cabeça principal daquella christandade....（５）

＜松田・川崎訳＞ではque Deos temとcabeça principalの間にcomoを補って一息にDom Antonioにかける（かの地のキリシタンの頭として主なるデウスが定めておられるドン・アントニオ‥）、que Deos temのみがDom Antonioにかかってが故人であることを表し、cabeça principal以下はDom Geronimoにかかると訳者は判断した。

▲この機を逃さず1588年初頭グレゴリオ・デ・セスペデス司祭にかの地での伝道が命じられた。

E com esta boa opportunidade se ordenou logo no princípio deste anno de 1588 fazer o P^e^ Gregorio de Cespedes esta missão....（９）

松田訳では「ドンプロタジオ（有馬）は‥この機会に‥布教を開始するように命じた」となっているが、原文主語は有馬ではない（再帰動詞が使われていて主語は明らかにされていない。

▲注32以降に入る文の注記（９）

＜松田・川崎訳＞「グレゴリオ・デ・セスペデス師の一書簡の写し」とあるが、Wicki版ではこの行は、後世の写本作成者の挿入として省く。

▲家士の者180人が受洗した。

...a obra de cento e oitenta homens...（10）

ここは＜松田訳＞では「80人」

有家の司祭館について

▲多くの貴人や有力者が住んでいる有馬から１レグア程距たった有家の司祭駐在館に‥‥。

Na rezidencia de Arie, que hé huma legoa de Arima onde morão muitos fidalgos e gente nobre....（12）

この箇所は＜松田訳＞「有家は有馬から一里距たり、多くの貴人や身分の高い人たちが住んでいるところであるが‥」。＜松田訳＞では「多くの貴人や身分の高い人たちが住んでいる」のは有家、曽田訳では有馬となる。

▲以下のような短信の前の注記（12）

＜松田訳＞「フランシスコ・ペレス師の書簡の写し」

Wicki版はこの１行は写本作成者の挿入として除く。

■Wicki注は松田川崎訳にはないものだが、疑点もある。

＜Wicki注20＞ はコテダヤスマサ（～1580）は籠手田安経（～1582）、『国史大辞典』

●２章

▲「シナへのナウ船の出航後」への注１（14）

松田注によると、「1588年２月末にドミンゴス・モンテイロの定航船がマカオに向かって出帆した」。Wicki注ではそれ以前の1587年10月、日本からナウが出航した

▲今からわたしは雲仙の岩 を見に行くところです

Rocas（16）。松田訳では「花」（rozas）

▲山の中でついに目が見えなくなり

se lhe foi a vista dos olhos...（16）。

松田訳「ある山の真中で月が見えた」

▲祈りを捧げるのにふさわしく奥まって隠れています。（18）

松田訳に記述なし。

▲当年有馬で成人で授洗した者は‥‥しかいない

Em Arima se tem baptizado este anno somente dos adultos , porque das crianças que nascem se fazem....（18）

Wicki脚注11によれば人数が脱落。松田訳ではここを「ただ２人」と訳してあり、Wicki版のdos（前置詞）をdois（数詞）と読んでいる。

▲（薬の入った）革袋（19）

松田注31にテキストの原語borzoletaはborzeletaの誤りとあるが、Moraisの辞書（António de Morais Silva, *Diccionario da lingua portugueza,* 1789）にborzoleta。

▲製塩をする５つの村

Fizerão-se cinco lugares de christãos aonde fazem sal....（21）

松田訳では「塩（sal）」ではなく「石灰」（cal）」

●３章

▲寄港先で危害が加えられることのないよう

松田訳「予に対しなんらの侮辱を加えぬかぎり」。*que procuraria se lhe não fizesse nenhum aggravo*（25）の誤訳。

▲このような方法で毎年４コント近くの米俵を金に替えて蔵にしまいこみます。その上に、‥‥（27）。松田川崎訳脱落

▲手配師はアマンデトクウン、かつてはわれわれの最大の敵比叡山の坊主でした。
Amandetocuun, que hé já perto de 70 annos de idade e foi primeiro bonzo de Fiyenoyama, nosso capital inimigo(28)
松田訳、「当初は比叡山の仏僧であり、(現今) 我らの大敵であります」、曽田訳は文の構造から「大敵は比叡山のこと」と判断した。

■以下はWick氏の誤り
▲主君である信長の娘二人も彼の妾にされました。１人は越前国領主柴田殿の息子の妻で、舅は彼に殺されました。もう一人は５カ国を治める家康の息子の妻です(27)。
＜Wicki注８＞(越前国領主柴田殿の息子の妻) 柴田勝家の長女 (勝家の妻は信長の妹) は秀吉と結婚した。淀君として大変よく知られた女性である
＜Wicki注９＞「(家康の息子の妻) 千姫 (秀忠の娘)」は誤りで、松田注(18)「信康の妻？」が正しく、「？」は不要。

◎この二つの注８、９はともにWick氏の誤り。信長は自分の娘や養女を主な重臣の嫡男に嫁がせた (丹羽長秀の子長重ら)。柴田家は織田家中では最重要の家である。その息子は権六といわれた人物かもしれない。「柴田殿の息子の妻」なのだから柴田殿の娘 (茶々) ではない。またもうひとりの信長の娘では家康息子の妻は、松田注が正しく徳川信康妻だった信長長女五徳のこと。小牧長久手講和後に人質として京に行って、秀吉の保護下にあったから、宣教師たちはこのように思ったのだろう。千姫は家康の息子の妻ではなく、息子(秀忠) の娘。服部『河原ノ者・非人・秀吉』618頁参照

▲Wicki注10で織田 (羽柴) 秀勝とするのは織田信雄の誤り。秀勝は婚約したが、結婚後まもなく死去した。

●４章
▲一体誰にこのようなことを任せられようかと思います。
a quem se isto possa cometer, …(32)
(松田訳) それが誰のせいであるか (よく) 判りません。Cometerは任せる、任務をあたえる等。責任を帰すという意味はないと思われる。

▲告解の時期
tempo de confissões…(34)
松田訳「混乱した時期」

▲それにいくら内密に行動しても、われわれに悪意をもっている人間がいれば、その人間がわれわれを告発することまで防ぐことはできません。
…nem posso estar em tanto segredo que, havendo alguns que nos tenhão má vontade, nos não accuzem…(34)
松田訳「また私たちに悪意を抱く者がいて、彼らが私たちを告発しないようにするためにも、あまり隠れて (ばかり) いるわけにも参りません。」(誤訳か)

▲ただの一人も裏切る者はなく
nen hum só prevaricou….(34)
松田訳「このコンスタンチイノはただに罪を犯さなかったばかりか」

▲彼の滞在中にわたしが書かせた２通の手紙
…consolação que receberão com duas cartas que lhes fiz escrever enquanto aqui esteve….(34)
松田訳では「私がここにいる間に (尾張の) 重立ったキリシタンたちに２通の書状を送りましたが‥」、つまり私 (オルガンティーノ司祭) が尾張に向けて手紙を書いたことになっている。
Wicki版では「滞在する」が３人称 (esteve)、「手紙を書く」という箇所は使役動詞を使って「わたしが書かせた」(fiz escrever) となる。コンスタンティーノが4月16日に来て18日に帰ったのであれば、その間に尾張に手紙を届けるのはむずかしいと、曽田は判断している。

▲一所に集まって(34)
松田訳「毎月一カ所に集合し」。Wicki版でのcada vez (次第に) が松田版ではcada mêsになっているものと思われる。

▲もし妻や侍女たちがキリシタンであることに気がつけば、越中殿は自身の出陣中に彼女たちが家を出たことも察するでしょうし、それはどうあっても許し難いことですから、いかなる情けも妻にかけることはないでしょう。
E sabendo o marido que Gracia e suas criadas erão christãs, havia de cuidar que no tempo que elle estava na guerra sahirão fora de caza, que seria para elle couza intoleravel e não teria nella soffrimento algum.(36)
(松田訳) ガラシャの夫は、彼女とその侍女たちがキリシタンになっていたことを知った時に、自分が出陣中、彼女たちが外出したであろうと感づいたことでしょう。(そして)それは彼には堪え難いことであって、彼女に対してなんらの忍耐も持ち合わせなかった (わ

けでもありました)。
前半部分は（夫が既にガラシャの入信について知っているかいないか)。どちらの意味にもとれる。後半部分はポルトガル語では過去未来形になっている。

▲家康がなんらかの男気を示さないのは計算高さの表れなのだろうと。
E diz o povo que não mostrar Yyeyasu algum valor lhe vem de ter pequeno coração.(36)
松田訳「家康が（この訪問を）あまり重んじ（る様子が）ないのは、彼が（関白を）たいして気にしていない証拠だと言っています。」
Mostrar valorは「重んじる」ではなく「勇気を示す」。この表現は中世文書に頻出し、現代でも使うとのこと。ter pequeno coração「冷淡」「計算高い」etc.
反対の意味のter grande coraçãoは「寛大な」「おおらかな」「情け深い」

▲坂東の北条殿は家康の領国に侵入しつつあり、それは暴君にとってもうれしい知らせではないはずです。
松田訳「坂東の北条殿（の領地）が家康の領国に（加えられることに）なっていますから、それも暴君にとって喜ばしいことではありません。
…e o Fonjodano do Bandou vai entrando pelos reynos de Yyeyasu, couza de que o tirano se nâo pode alegrar.(36)
北条氏の敗戦後に家康を関東に移封したのは秀吉の命令であるから、松田・川崎訳はおかしい。

▲それらの新公家を古くからの公家と同列に、あるいは彼らより上位に扱うので、
...alevantando-os nas dignidades dos primeiros e antigos e ainda maiores...(37)
松田訳では「これらの公家は、最初の、そして往時の位階にとり立てられたばかりか、なおそれ以上の位階が与えられ‥」

▲またわれわれのことを認めないことも確実です。(37)
松田川崎訳からは脱落

▲もしわれわれが命令に反して留まっていることを知れば必ずや態度を豹変させることが予想されます。
…sabendo que nós ficamos em Japão contra seo mandado, sem falta se há-de alterar muito....(38)
松田訳では「私たちがその命令に逆らっていることを彼が承知していますからには、かならずや（現下の情勢は）大いに変わって来るにちがいありません。」
どちらの意味にもとれる。

日本史第３部
ここ日本副管区にて1588年以降起こった出来事について

1588年
第１章

迫害の最中高来（たかく）で見られた成果の兆しについて

87年末クリスマスの少し前に、副管区長[1]は他の何人かの司祭を従えて高来[2]を訪れた。コレジヨ、カーザ・デ・アプロヴァソン、セミナリヨを彼の地に移すことについて、ドン・プロタジオ[3]と再度話し合って早急にはっきりした回答を得ようとの考えからだった。他意のないことを有馬が祭壇の前で誓ったので、副管区長はその場にいた他の者たちの意見も聞きながら、イエズス会組織の大半を高来に移転することに決めた[4]。

豊後の国が滅ぼされて以来、コレジヨとカーザ・デ・アプロヴァソンは、大変な労苦を重ねて海路山口に移されていた[5]。その後国王フランシスコ[6]の死によって豊後国との良好な関係はいよいよ断たれ、イエズス会の人間でそこに残る者はいなくなった。ただし副管区長はできる限りの手を尽くしてほどなく司祭と修道士を２人ずつそこに派遣し、その内各１人はそのまま潜伏したのだったが[7]、他の２人は王子[8]の命令で山口に帰って来た。

豊後からの支援を待ちつつコレジヨとカーザ・デ・アプロヴァソンは数カ月間山口に置かれた。その間山口のキリシタンの教化を行ったが、27年以上[9]われわれとの

---

[1]＜Wicki注１＞Gaspar Coelho（ガスパー・コエーリョ）
[2]＜Wicki注２＞タカク（肥前)。有馬・島原・口之津がここに位置する。Cf.　第２部19章
[3]＜Wicki注３＞アリマシガズミ（有馬鎮純（しずすみ））/ハルノブ（晴信）/ D.Protásio。※正しくは日本発音はシゲズミ（服部注記）
[4]＜Wicki注４＞Cf. SHUTTE, *Introductio* 499 506
[5]＜Wicki注５＞1586年12月～1587年１月。前掲書第４巻57章およびSCHUTTE, *Introductio* 122 579 697-698。
[6]＜Wicki注６＞オオトモヨシシゲ（D.Francisco）は1587年6月28日に死亡。第４巻51章。
[7]＜Wicki注７＞Cf.　後出第５章
[8]＜Wicki注８＞オオトモヨシムネ（大友義統（よしむね））＝ドン・コンスタンチーノ（同上)。
[9]＜Wicki注９＞1556年より。Cf.　第１部16章（1556）および第４巻57章（約30年間)。

接触を断たれていた彼らは、ようやく司祭や修道士と話ができることに心から安堵していた。ところがそこに暴君の命令がにわかに下され[10]、日本中のあらゆる土地からわれわれを追放するよう命じた。その結果コレジヨとノビシャドも新たな流浪と巡礼を強いられることとなった。（以前に述べたように）[11]われわれ全員は平戸に集まった。ナオ船の出航までそこで待機するよう暴君が命じたからだ[12]。

平戸には十分な土地がなかったので、司祭と修道士の大半はドン・ジェロニモ[13]の知行する島の一つに渡った。島には草ぶきの教会堂がいくつかあって、その内の一つに、中央部分は信者がミサに与り説教を聞く場所として残して、コレジヨとノビシャドを同居させることとした。このことは生月（いきつき）だけでなく周囲の島のキリシタンにとっても大変有益だった。なぜならその間われわれが彼らを導き彼らの霊魂の問題に指針を与えることができたからだ。

コレジヨとカーザ・デ・アプロヴァソンが居候することとなった山田[14]の教会堂から1レグア程のところに壱部（いちぶ）[15]という集落があり、そこに至るまでの土地―ドン・ジェロニモの婿ドン・バルタザール[16]の領地―にもう一つ別の教会堂があった。そこには都のセミナリヨから司祭や修道士たちが移って来ていたが、厳しい寒さ・土地の不便や必需品の不足から多くの者が様々な深刻な病に冒されていた。

デウスの名誉にとっても、イエズス会の確立のためにも、また日本のキリシタン（彼らを善導するために、わが会は39年にわたり[17]多大な骨折りを重ねてきたのだが）の利益のためにも現状がふさわしくないことが、それまでの幾多の協議から結論づけられた。われわれはコレジヨ・ノヴィシャド・セミナリヨを平戸から長崎に移し、そこでドン・プロタジオが既述の決断を下すのを待った。その間われわれは、イエズス会を領内に抱えることでどのような不利益が起こりうるか、他方でどれだけの徳行をデウスの前に積むことになるか、さらにそうすることが彼の義務でもあることなどを有馬に説明した。有馬の方でも、イエズス会がこれほどの困難や危険にさらされたり重い負担を強いられたりするのは、デウスへの奉仕とキリシタン守護のために他ならないことや、これだけの敵に囲まれた上に司祭による秘蹟や励まし・善導を失うようなことがあれば信仰を守ることは（人間的にいって）不可能だということなどをよく理解した。こうして全てについて納得した上で、有馬殿[18]はわれわれの提案の一つ一つに頼もしい返事を与えた。

これらを有馬殿と話し合うために副管区長が加津佐[19]より出発するよりも先に、一人の敬うべきキリシタンが、そこから40レグア以上離れた平戸よりドン・ジェロニモの伝言を携えてやって来た。ドン・ジェロニモはすでに神のもとに召されたドン・アントニオ[20]の嫡子で、彼の地におけるキリシタンたちの長であり、伝言には、彼自身、彼の兄弟、一族、配下の者の決意が縷々と述べられていた。

その伝言の筋の通った内容にその場にいた者たちは大変な感銘を受けた。キリシタンとしての信仰が表され、修辞に優れている上に首尾一貫していたため、司祭たちはうろたえ、先を争って内容を聞こうとした。

手紙に託された内容は大略以下のようなものである。

「パードレ様方が平戸に滞在しておられた間、このまま日本に居残って下さるという確信がもてずに、繰り返しお伝えしたことですが、シナまでお伴させていただく覚悟でおりました。そのことで身分と収入を失っても、デウス様の前に大きな功徳を積むことになるからです。けれどもこれから先も日本に留まって下さると分かって心より嬉しく思います。なぜならここにいるキリシタンたちは、パードレ様方の胸の内が分からず、大変な苦悩をもってこの出発を見ていたからです。そして道理のないことですが見捨てられるのではないかと怖れていました。けれどもパードレ様方がキリシタンのことを大事に思い、わたしどもを守護するために日本に残って下さること、そしてわたしどもをいとおしんで危険に身を挺して下さることを知り、キリシタンは今まで以上に信仰を強めねばならないと思う次第です。わたしはパードレ様

[10]＜Wicki注10＞秀吉は1587年7月24日に禁令を発布。第4巻55章。
[11]＜Wicki注11＞同上第57章。
[12]＜Wicki注12＞同上第57章。
[13]＜Wicki注13＞コテダ/D.Jerónimo。生月島のこと（Cf. SHUTTE, *Introductio* 700）
[14]＜Wicki注14＞生月の山田（姉崎 101）。
[15]＜Wicki注15＞イチブ（第1部42章）。
[16]＜Wicki注16＞すなわちドン・ジェロニモ(II)コテダの娘婿。
[17]＜Wicki注17＞日本の計算によれば1549年から1587年まで。
[18]＜Wicki注18＞Cf. 注3
[19]＜Wicki注19＞高来のカツサ。Cf.　*Cartas* 1598II, 238v。
[20]＜Wicki注20＞コテダヤスマサ（D.António）は1580年に死亡。Cf. 第2部24章。※本文33頁参照

に以下のことを心よりお願いしたいと思います。それは、パードレ様とイルマン様の何人かをわたしどもの島々に遣わしてほしいということです。平戸の肥州さまは神さまのことに関心の薄い異教徒ですが、たとえ肥州さまを説得できなくても、ともかく島に来ていただこうと兄弟たちとも話し合いました。パードレ様方全員をお招きしおかくまい申し上げることのできないのが何よりの無念です。パードレ様もイルマン様もドン・プロタジオのところにいらっしゃるそうですが、プロタジオに少なからぬ羨望の念をさえ感じます。

もし暴君が新たな迫害を始め、パードレ様やイルマン様方を殺せという命令が下されるなら、貴会の大半がかくまわれているあの土地から始まるに違いないでしょう。そのようなことを耳にすればわたくしも即座に合流するということをどうかお知りおき下さい。なぜならパードレ様がキリシタンのために進んで命をなげうっていらっしゃる時に、わたくしドン・ジェロニモがキリシタンでありながら自分の領地で苦もなく生きながらえるのは、まったく不名誉なことだからです。この争いの時にあって、わたくしにもキリシタンへのアモール（愛）と、共に死ぬ覚悟があることを示したいのです。」これら一言一句が司祭たちの士気を高め、彼らを守るためならどんな苦難も辞さないという決意を植えつけた。

先に述べた決断が下された後、イエズス会の人間は以下の方法で再配置された。

コレジヨは千々石に、カーザ・デ・アプロヴァソンは有家に、都と下（しも）のセミナリヨは合併して八良尾に移された[21]。下（しも）地方の上級司祭[22]は何人かの同僚と一緒に有馬に、副管区長は２人の司祭と３人の修道士とともに加津佐に、１人の司祭と１人の修道士は神代（こうじろ）[23]に、別の１人は古賀[24]に、２人の司祭が３人の修道士を連れて大村に、３人の司祭がドン・バルソロメウ[25]領内の浜辺の地に潜伏した。２・３人の司祭が２人の修道士と共にドン・ジェロニモ領内平戸の島々に、４人の司祭と２人の修道士が天草に、２人の司祭と１人の修道士が大矢野[26]（ここは先年領民のすべてがキリシタンとなっていた）に移された。さらに２人の司祭と１人の修道士が海路を忍んで豊後の国に向かった。そこでドン・パウロの城に潜伏し、折を見て城から出て告解を聞いたり少年たちに洗礼を授けるはずだった。オルガンティーノ司祭は日本人コスメ修道士[27]とともに小豆島[28]に残って潜伏した。

こうして短期間に司祭・修道士およびセミナリヨの少年たちの再配置が行われた。さらに人数に応じて必要物資やミサの祭服も割当てられた。その際に諸国から回収されたイエズス会の財産は上記の場所すべてを転々とすることとなった。というのは、まず全ての物資が平戸に集められたのだが、キリシタンの家で保管できないものは金を払って異教徒の家に預けられた。そこからさらに長崎に移されたが、そこは安全でなかったので、一部は天草の島々に仮置きされた。そして再度集められて今度は有馬に運ばれた。これらのことは今回被った迫害において最大の労苦であり重荷の一つであったことは間違いない。なぜなら聖具や施設に必要な備品は、食料米・祭服とともに各人が持ち運ばなくてはならなかったからだ。さらにミサのための葡萄酒は、ポルトガルよりインド、インドよりシナを経て日本に運ばれるものだったが、このような長旅と船での移動によってどのようなダメージを受けるおそれがあるかについては説明するまでもないだろう。

副管区長は、司祭と説教師である修道士が一同に会しているこの機会を逃さずに、高来においても早々に改宗を進めることを強く望んだ。そこで「これまでこの地において悪魔が邪魔立てしてきたことを今こそ実現すべきでありましょう」と殿に進言したところ聞き入れられたため、早速この事業に着手した。そこでの成果についてはこの事業に実際に関わった司祭たちの書簡（下に概略を述べる）からお分かりいただけると思う。

初めに下地区の上級司祭であるベルキオール・デ・モウラが、他の司祭と一緒に神代の城に赴いた。ここは先年来、戦によってドン・プロタジオの配下に置かれていた。城主と家士の者に説教を行うとすぐに城主自身・母親・息子と娘に加えて領内の仏僧すべてが受洗し、領内

---

[21] ＜Wicki注21＞Cf. *Cartas* 1598 II 239v。セミナリヨはすでに1588年1月17日には八良尾にあり、1589年4月30日までここに置かれた後、加津佐に移された（SHUTTE, *Introductio* 701-702）。

[22] ＜Wicki注22＞おそらくベルキオール・デ・モーラ神父（Cf. 後出f.4v; *Cartas* 1598 II 239v; 目録1588年12月：*Goa 24 I* 180v）。

[23] ＜Wicki注23＞コウジロ（高来）。

[24] ＜Wicki注24＞古賀（長崎近郊）。

[25] ＜Wicki注25＞オオムラスミタダ（大村純忠）。

[26] ＜Wicki注26＞オオヤナ（天草）。

[27] ＜Wicki注27＞Cosme de Miyako。1587年当時イエズス会にはもう一人別のコスメ（長崎出身見習い修道士）がいた（*Goa 24 I* 161v）。

[28] ＜Wicki注28＞ショウドシマ（内海）

の主だった者計150人が受洗した。二度目に訪れた際には、100人が受洗した。このように継続して改宗が実現した結果、異教徒はこの地にほとんど見られなくなり、当月（1588年７月）までに計1688人が洗礼を受けた。

その間神の特別な恩寵を示す出来事があった。20年以上前のことだが、すでに神のもとに召された司祭ルイス・デ・アルメイダが、当時２・３歳だった島原殿の娘[29]を改宗させたことがあった。当時は殿も息子たちも洗礼を受けておらず、異教徒だったのだが、修道士とよい関係を保ちたいがために娘をキリシタンとしたのだった。娘は神に縁遠い異教徒の中に育ったため、成長した後も自身が洗礼を受けたという事実をさえ聞かされることはなかった。そして父親のいいつけ通り神代の城主と結婚した。ある時夫と家士の者が司祭の説教を聞いているのを間近で聞いたが、そのことで身をもちなおし救いを得る道が開かれた。彼女はすぐに祈りを覚えミサや告解にも参加するようになった。

このようにして洗礼を施した後、司祭たちはドン・プロタジオ配下の大野城を通過した。そこではすでにキリシタンであった城主とその妻子に加えて、家士の者約40人[30]が洗礼を受けた。

また殿は司祭たちに次のような出来事を語った。彼が病床にあった時、以前からの家臣で異教徒である男が、殿の病状に胸を痛めて次のように言った「ご主人様、おからだの具合がよろしくないようですが、ご快復は難しいのではと案じております。なぜなら御承知のように当地では四面[31]という仏が常より敬われてきましたが、ご病気はこの四面の罰であると思われるからです。当地でキリシタンへの改宗が始まって以来、御像は全ての者により大変な辱めと嘲りを受け廃棄されました。もしご主人様が打ち棄てておいでになる御像を探すようお命じになって以前のように重んじられたなら、ご病気からはたちまち快癒されるものと存じます」。そこで殿は仏像を手に入れるためにわざとこう言った「なるほど、それならこれほど弱っているわたしの代わりに、其方が仏像の在り処を探し出してくれ。そしてしかるべき礼拝が捧げられるようここに持ってきてほしい」。家来はこれを聞いて小躍りし、仏像を隠していた場所からとり出して殿の前に差し出した。殿はすぐに小斧を持ってこさせ、木っ端みじんにした上で火にくべるよう命じた。家臣はこのような重罪を見て、主人が死ぬか病をさらに重くするかのどちらかであろうと期待した。だがわれわれの救い主はお喜びになって、翌日には主人はすっかり快復した。異教徒は心算が狂って当惑し、これほど効験のない偶像に以前ほどの信を置かなくなった。

以前に薩摩が優勢だった頃、ドン・プロタジオは高来の中で最もよい城と土地（三会（みえ）と島原）を力ずくで奪われていた。だが今彼らが落ち目にあるのを見て、取られたものを取り返そうと決めて実行に移した。この機を逃さず1588年初頭グレゴリオ・デ・セスペデス司祭にかの地での伝道が命じられた。その結果は以下に述べる書簡（後に司祭が有馬でしたためたもの）から伺うことができる[32]。

わたしたちは主キリストの日[33]に新たな誓いを立てて有馬を出発しました。高来の主要な領地である安徳[34]と島原で、以前に播いておいた種から収穫を得ることが目的でしたが、神の思し召しにより当地での収穫は上々でした。とくに同行させた日本人伝道士である修道士４人が布教してくれたことが功を奏しました。まず彼らが行く先々で教義を説明し、その後でわたしが行って、すでに教えを理解し受洗を待つばかりの者たちに洗礼を施したのです。このようなやり方でまず安徳城から布教を行いました。城主は有馬殿の伯父（叔父）で、有馬の家老ジョアンの兄弟にあたる貴人です。彼は３・４年前キリシタンとなった折には、重い病に冒されて余命いくばくもないと思われており、そのため痛みに苛まれ生命を脅かされる中わずかに説教を聞いただけで受洗しました。その後病気から快復しましたが、相次ぐ戦乱や障害のため城中に他のキリシタンはなく、息子も家来もみな異教徒であるような状態でした。ですが安徳殿自身も神のことにさほど関心がなく、また神についての理解も不足していたために、周囲の者との行き違いはほとんどありませんでした。

このような状況下、あるクリスマス前夜、神の思し召しによって殿は有馬の教会堂に９歳になる長男を連れて

[29]＜Wicki注29＞1563年３、４歳でマリアという洗礼名を得た（cf. 第1部44章終り部分）。
[30]＜Wicki注30＞*Cartas* 1598 II 240r:「その他にも40（人の者）がそこからすぐ近くの大野城で洗礼を受けた。」「そこ」とは三会と島原のこと。
[31]＜Wicki注31＞ホトケ・シメン？
[32]＜Wicki注32＞手稿本のこの箇所には、フロイスのものとは思われない不必要なタイトルの挿入がある（校訂者脚注参照）。
[33]＜Wicki注33＞1588年１月１日
[34]＜Wicki注34＞島原の近くのアンドク（姉崎 81）。

きました。息子をキリシタンとするためです。副管区長が洗礼を施しマンシオという名前を与えました。その後にわれわれが領地を訪れた際にも再び殿は教えを受け、家臣たちに行う講義も全て一緒に聴講しました。その結果安徳殿は生まれ変わったようになり、今こそ真にキリシタンになったとわたしに伝え、それまで命の長らえたことについて主に感謝の意を表しました。彼の２人の娘、城中の全ての女、さらに家士の者180人が受洗しました。安徳城に滞在した間、殿はわれわれを厚くもてなし、また日本のキリシタンの行く末についてわれわれと様々な取り決めを結びました。そして万事において努力を惜しまないことを約束し今もそれを実行しています。

薩摩の連中がこの地方に攻め入って支配下においた時、島原で隆信と一戦を交えたことがあります（この戦で隆信は死にました）。その際（薩摩の言い分によれば）連中が勝利の神として奉じる八幡から勝利を授かりました。その恩恵に報いるために彼らは主神を八幡とする清浄で立派な神社を建て、城主と何人かの僧にその管理保存を命じました。けれどもわれわれの島原入りの後は、修道士が教えを説き、わたしが洗礼を施すというやり方で各地で伝道に邁進した結果、安徳殿や新しいキリシタンたちの熱意が高じて大変なものとなり、われわれの滞在した18日間だけで計1665人の者が洗礼を受ける結果となりました。彼らが神のことを十分理解して改宗していることが明らかだったので、真に正しい入口より信仰にいざなっていることが感じられ大変心が慰められました。

われわれがこれほど短期間で有馬へと戻ってきたのは、新年を間近に控えており、新年[35]は日本人にとって商売や家内の片づけに大変忙しい時期だからです。今は彼らを束縛しないでおいて、新年の初めの月（新月）から８～10日ほどたってから布教を再開すればよいだろうと考えています。次回の布教で悪魔は完全に破れ去ることを主に信頼しています。またその実現は容易（たやす）いはずです。なぜならこの度３つの土地で行った布教において、指導的立場にある者、地位のある者すべてが洗礼を受け、残るは庶民だけとなっていますが、彼らを改宗させるのは難しくないはずだからです。

三会では５人の僧侶が受洗しましたが、その内の１人が洗礼前にわたしのところにやって来てこう言いました「わたしはあなた方の聖なる教えが真実であり、わが国の諸宗門が誤っていることをよくよく承知して改宗いたします。そのことをはっきり示したいので、寺に所有している数多の偶像（彼らのホトケ）を持ってきて打ちこわし、薪にして燃やそうと思います」。こう言って受洗した直後に家に帰り、仏像を抱えた２人の男を従えて戻ってきました。そして以前の門徒の面前で、彼の感心な望みを実行に移しました。仏像が薪となって火にくべられると、非常に寒い日だったため、われわれはそこで暖をとりました。

三会から出た後に聞いた話では、この僧の行為に触発されて、他の僧たちも同じことを行ったそうです。

この数日の間に多くの告解を聞き、島原に住む古くからのキリシタンを大いに助けることができましたが、このことでわたしの心も大変慰められました。彼らは長年領主による戦や迫害によって苦しめられ（だがその領主も今やデウスの公正な計らいによって追放されました）、われわれと13年ないし14年接触できず、司祭の訪問や援助もうけることができませんでした。ですがその固い信仰ゆえに今住民は新しい光を享受しています。その光とは、かの地に住む異教徒たちの目を開き真の造物主について知らしめるために、主自ら照らしたまう光のことです。

われわれとキリシタンにとって常に最大の敵であった島原の僧侶は、これまで彼の地を支配し専横の限りを尽くしてきました。その支配は未来永劫続くかと思われるものでしたが、今われわれの主デウスは彼らに大きな苦難―これまでの熱心な崇拝者からさえ貶められ辱められるという苦難―をお与えになりました。僧侶たちの胸の痛みや苦しみはいかばかりのものでしょう。彼らは門徒の減少につれて物質的にも窮乏するようになり、ついには薩摩に行って生計を立てようと決めました。そして可能であれば（持っていくことができないので）寺院まで売却しようと考えました。修道士ヴィセンテ[36]はこれら僧侶のうちの主だった１人に、せめてわれわれの話だけでも聞いてみるよう説得しようとしました。そうすれば何が真理であり、なぜ島原の住人がキリシタンに改宗するのかが納得されるだろうからです。ですが僧はかの地における悪の柱のような人物で、また傲慢で横柄な人柄であったため、命の書[37]に記される価値はなく、そのため「そのよ

[35] ＜Wicki注35＞当時日本人の新年は今より遅く、1588年1月28日にあたる（cf. *Cartas* 1598 II 242v）。
[36] ＜Wicki注36＞ホウイン（法印）。
[37] ＜Wicki注37＞cf. 黙示録3.5。

うな話は聞いたとしても理解できないし、キリシタンになるには年をとりすぎた」と答えました。

これら３つの地方にはすでに教会を建てるための土地が定められ、大変よい適切な場所が選ばれています。今少し情勢が落ち着けばこの地で大いなる成果のあがることを主デウスに期待いたします。

1588年１月18日有家にて

有家の司祭館について

多くの貴人や有力者が住んでいる有馬から１レグア程距たった有家の司祭駐在館に、ノビシャードが移設されたが、その数日前からイタリア人司祭フランシスコ・ペーレス[38]と日本人修道士ロケが行ってキリシタンの教化に努めた。司祭はそこから以下のような短信を送ってよこした。

「神のよき思し召しによって当地とその近隣であがっている布教や告解の成果について、もっと頻繁に閣下にご報告申し上げたいと思いながら、業務の多忙によってなしえていません。

昨日田舎[39]の方からこの有家にやってきました。この度の布教での改宗者は1000人を超えるものと予想されます。なぜなら既に改宗者は700人を超えており、現在も修道士ロケ[40]は堂崎の城で昼夜を問わず布教を続けているからです。またここ有家にも別の修道士が１人おり、さらに時間がないため布津[41]に留まって活動している修道士も数人います。深江だけで500人ばかりが新しくキリシタンとなりました。１週間余の滞在中に数え切れないほどの告解を聞き婚姻の秘蹟を授けました。今後も訪問を続ければ（もとよりそのように希望していますが）、短期間でとてもよいキリスト教会ができることでしょう。わたしは司祭としてここに１人で活動しており、四旬節ということもあって、日に30人くらいの告解を聞きます。その後にすでに教理を伝えた者にさらなる教化を行い、合わせて92人に洗礼を施しました。

1588年3月20　有家にて」

司祭アルヴァロ・ディアスは、三会とそこから1レグア離れた島原に戻り、すでに第1回目の洗礼により心を動かされていた異教徒たちを励ましたり、教理を説いて聞かせた結果、計2200人が洗礼を受けた。

二回目に司祭が戻って布教を行った際には、600人が洗礼を受けた。

第２章

高来での改宗の進展、および司祭ペドロ・レイモンがおこなった筑後での宣教について

シナへのナウ船の出航後[1]、都や下地方に住んでいるキリシタンで貴人や主だった立場にある者たちが、われわれに最も強く望んだのは以下のことだった。それはできる限り身を潜めて、これほど多くのバテレンが日本にまだ残っていることを暴君から悟られることのないようにしてほしいということだった。だがわれわれは日本人の間で大変よく知られており、どんなに努力しても見つからないようにすることは至難の業だった。

コレジヨが潜伏した千々石はドン・プロタジオの弟ドン・エステバンによって治められており、有馬より５レグア隔たった所にあった。６年ほど前の薩摩の攻撃によって、同地にあったすべては城もろとも破壊され、多くの者が捕われ殺されていた。千々石が再び有馬殿の統治下となった後、ドン・エステバンは以下のような許しを兄にもとめた。それは司祭と伝道師である修道士を一人ずつ派遣して、かの地に再び住みつくようになった者たちに布教し洗礼を授けることについての許しだった。許可が与えられると司祭らはできる限りの方法で布教と教化に尽力した。だが千々石は大変遠く、土地が貧しい上に山がちでもあったため、わずかな者だけで満足のいく布教をすることはできなかった。

はたせるかな、千々石には水と石はふんだんにあったが[2]、その他の全ての物は不足していた。容易に想像されることだが、コレジヨが移設した草ぶき家屋は狭くて居心地が悪く、また台車で外より持ち込まねばならない全ての必要物資が欠乏していた。だがこのように条件の悪い山地でも次第に喜ばしい成果があがりつつあった。しかもわれわれの主がコレジヨをそこに移設するようお命じになったのもまさにこのためであったと思われる。

[38] ＜Wicki注38＞Aliás Mogavero（注の意味不明）。
[39] ＜Wicki注39＞ynacasすなわち田舎。
[40] ＜Wicki注40＞当時50歳（Mon.Hist.Jap. I 248）。
[41] ＜Wicki注41＞1588年12月の目録によれば：Sucu（フランシスコ・ラグナ司祭と天草のパウロ修道士がいた）。同上　223。

[1] ＜Wicki注１＞ドミンゴス・モンテイロのナウ船は、1587年10月に平戸からマカオに向けて出発した（BOXER, *The Great Ship* 50-51）。
[2] ＜Wicki注２＞今日でも千々石はフロイスが記した通りの印象を訪問者に与える。

というのは、われわれの仲間は、教団に何らかの災厄が及ぶことのないよう僻地に追われ潜伏している身ではあったが、こと魂の救いの問題に関してはたえず住民の求めに応じずにはいなかったからである。かの地ではすでにキリシタンとなっている者でさえも、救済の喜びを知るに至っておらず、そのため祈祷を覚える努力も払われなければ、教会にも滅多に訪れていなかった。むろん告解を行うには程遠いありさまだった。

そこでレイトール司祭[3]は改めて布教に着手する決意をした。司祭がこの仕事を託した修道士たちも同様にそれを望んでおり、彼らはあちこちの村や土地を再訪しては、まるでまだキリシタンでない者に接するかのように信仰の基本や彼らがまだ習得していないことを一から伝え教化に努めた。そうすると元来日本人は救いを求め、また容易に聞いた話の内容を理解する能力があるため、すぐさま信仰に立ち返り、祈祷を覚え教会に通い、数珠・ベロニカやお守りを求めるようになった。さらに四旬節の際に告解についての説教をすると彼らの信心と熱意に火がついたようになって、進んで告解や鞭打ちの業をおこなうようにまでなった。このように順調に教化がすすんだがゆえの彼らの変化は、以前から彼らを知っていたものを少なからず感嘆させたほどだった。こうしてデウスのご配慮、司祭らの熱心な活動と修道士らの熱意により、かの地にまだ見られた異教徒たちも次第に改心するにいたり、改宗者の数は男女で500人ほどに達した。ドン・エステヴァンはいつも親しく個人的に教会のことを執り行った。

同年[4]６月２日木曜日のこと、千々石で次のような出来事があった。

当地に住むジョアンという若い貴人の家に、一人の男がまだ娘のような若い妻と一緒に仕えていた。ある時ジョアンがドン・エステヴァンの供をして遠出をすることになったので、その若い妻にそこから四分の一レグア離れた木場[5]という村まで彼の下僕を呼びに行くよう命じた。正午近く彼女が一人で歩いていたところ、同じくレオン の家に住むジュスタという敬うべき女性が後からやって来た。ジュスタは告解や聖体拝領もよくおこなう善良なキリシタンで、娘はいつも彼女から親切にしてもらっていた。ジュスタは娘に追いつくと次のように言った。「今からわたしは雲仙の岩を見に行くところです（雲仙は硫黄水の湧く非常に高い山[6]で、身の毛もよだつ様な恐ろしいところだ）。一人で参りますし、今日中に戻って来られましょうから、お前も一緒に来てはどうでしょう」。すでに正午を過ぎており、そこから雲仙までは３レグアほどだった。

娘はいつも女からよくしてもらっていたこと、また女を慕っていたことから、主人の言いつけで木場に行くところであることは黙ったまま、女について行くことにした。それからは女が前、娘が後ろとなり、雲仙に向かって言葉を交わさず歩いた。娘によれば、進むにつれて極度の疲れを感じ、目もよく見えなくなって、時に歩いている道もジュスタも見えなくなることがあった。1レグア半ほど歩いた山の中でついに目が見えなくなり 、どこを歩いているかも分からなくなった。鳥肌が立ち、悪魔の仕業ではないかと怪しまれたので、イエス様マリア様と繰り返し唱え日本語で総告解をした。再び目が見えるようになった時にはジュスタの姿は見えず、すっかり山の中に迷い込んでしまっていた。そこからは絶えず祈りイエスとマリアの清らかな御名を唱えながら家まで戻った。すると家にはジュスタがいて、その日は一歩も家から出ていなかったことが分かったのである。娘は次のように言った。「お顔も声も身につけている物も、何もかもがジュスタ様と瓜二つだったので、お供させていただくことに何のためらいもありませんでした」。

この若い妻は先だっての四旬節に洗礼を受けたばかりだった。告解をおこないイエスとマリアの尊い御名を大変崇めていたが、彼女の言葉によれば、数珠も聖体袋も身につけておらず所有してもいなかったということだ。

このことからも、日本人がキリスト教徒の護符によって身を守られていないために、どれだけ簡単に悪魔によって辱められ誘惑されているかが分かるであろう。

古賀[7]について

[3]＜Wicki注３＞ペドロ・ラモン司祭（Pedro Ramón）に同じ。
[4]＜Wicki注４＞1588年。
[5]＜Wicki注５＞千々石町木場
[6]＜Wicki注６＞雲仙は硫黄泉の噴出する大変険しい山で、17世紀にキリシタンに加えられた恐ろしい拷問によって宣教師文書中でよく知られている。今日ではホテルの立並ぶ温泉地となっている。
[7]＜Wicki注７＞長崎近郊。
[8]＜Wicki注８＞別名Gil de la Mata（ジル・ドゥ・ラ・マタ）。
[9]＜Wicki注９＞史料から1587年12月には神学を学んでいたことが分かる。インドで生まれ、1589年にイエズス会を脱会させられた。

古賀にはエジディオ司祭[8]がアマドール・デ・ゴエス修道士[9]とともに身を潜めた。古賀は有馬殿の治める城のある場所で、ここでも主のために多くの奉仕が捧げられたことが以下の司祭の手紙から伺われる。

当地での活動は多忙をきわめておりました。と言いますのも、修道士が説教をし教理を伝え、また子どもたちに教育を施す一方で、わたくしが告解を聞き洗礼や婚礼の秘蹟を授けることに終始着々と取りくんできたからです。ほとんど常に大赦の連続でした。多くが正され多くの無知が取り除かれました。このような向う見ずな活動を主がお咎めにならないことを主に信頼いたします。なぜなら幾多の魂の救済のために行われたことだからです。すでに告解を聞くことが日々容易となっていますので、もし聖なる従順が死ぬまでわたくしにこの仕事に就くことを許しますなら、この世で実現できるもっとも幸福な務めとなることでしょう。

住民の熱意は日ごとに増しており、城主・家中の者ともに大いに信仰を深めております。

古賀は大変過ごしやすいところです。川や泉等、涼気を感じる場所が多くあり、とりわけ一つの川は20尋もの滝となって、自然の造形美を誇示しながら岩壁をしぶきをあげて落下しています[10]。そのため当地は全般に非常に涼しく、日光から守られ、また木々にも囲まれていて、どんな炎暑の日でも寒さを感じるほどです。また祈りを捧げるのにふさわしく奥まって隠れています。

この場所でわたしたちは時勢にふさわしくいくつかの草葺小屋に分かれて暮らしています。

1588年４月30日　古賀にて

当年有馬では成人で授洗した者は‥‥しかいない[11]。というのは出生時に洗礼を受けることが通例となっているからである。秘蹟の効果や教会との密な連絡によってみなが助けられている。

筑後の国久留米城[12]について

昨年小寺官兵衛殿の働きかけによってキリシタンになった貴人の中に、小早川殿[13]の弟籐四郎殿[14]がいる。小早川殿は山口の国主輝元の叔父で、輝元が知行する９つの国すべての総家老となっている。暴君は昨年この小早川に、彼が取り上げた伊予の国の代わりに筑前の国を与え、現在小早川はここに住んでいる。また暴君は筑後の国の一部も小早川に与えたが、ここにまだ若い籐四郎殿が住んでいる。またさらに暴君は籐四郎殿を、神の元に召された豊後の国主フランシスコ殿の娘マセンシアと結婚させた。

この青年については、類まれな資質・判断力と性格を有するため、老いても実子に恵まれない小早川殿は彼を養子として迎え王国と地位を継承させる考えだろうと世間では噂されている。それは日本国の大きさから言って相当なものだ[15]。

この青年がキリシタンとなったのは戦中の大変多忙な折で、様々なことに気を取られる中でのことだったので、教理はたまたま耳にした程度だった。その後暴君が博多で国主の子弟や有力大名らに棄教を命じた時、改宗してまだ２カ月にしかならなかった籐四郎殿もその中に含まれていた。彼は当時神の摂理について理解せず興味もさほどなかったため、どうすればよいかよく分からず、ただ暴君に逆らわないがために、仰せの通りにと答えた。そしてその言葉と何ら違わないようキリシタンと認められるような態度は見せず、事実彼の心の中は冷えきっており、救済を求める思いもほとんどなかったのである。

われわれの主は彼を立ち直らせるために、それから２カ月もたたないうちに彼をマセンシアという女性と結婚させた。彼女は豊後で改宗して以来常にけなげで誠実な態度で信仰を守っており、また育ての親であるカテリーナという乳母を豊後から連れて来ていたが、この乳母こそは家門の誇りであり徳と献身と情けの鑑（かがみ）のような女性であった。このようにして一方でマセンシアが、他方でカテリーナが、籐四郎殿を熱心に励まし悔い改めと教会への帰還を説いた。元来穏やかで性質のよい籐四郎殿もそれを望んでいるかのように見えたが、二つの大きな障壁が彼を妨げた。一つには、回心すれば暴君の耳に入り、こうも簡単に言いつけに逆らった咎により罰せられる懸念があった。またそれに劣らず彼が危惧したのは、兄

[10] ＜Wicki注10＞今日長崎市・矢上町・東長崎町に位置し、滝の観音と呼ばれる。

[11] ＜Wicki注11＞テキストには人数が脱落。ただし1588年の島原・三会・神代での受洗者数は、書簡集1598年II,240rより類推することが可能である。

[12] ＜Wicki注12＞クルメ（ANESAKI 91）

[13] ＜Wicki注13＞小早川隆景、毛利元就の３男、小早川氏の養子となる。

[14] ＜Wicki注14＞籐四郎殿については*Cartas* II,1598,245v～246f 参照。毛利元秋、元康あるいは元清か？

[15] ＜Wicki注15＞1592年小早川は木下家定の五男（秀吉の養子となっていた）を養子として迎えた（PAPINOT 292）。

の小早川殿に知られることだった。兄は暴君の迫害以来すっかり変わってしまい、一見したところわれわれのことには関心がなくなったようだった。籐四郎殿は兄に全面的に依存していたので、兄の機嫌を損ねて王国と地位の相続権を失うことは望まなかった。

しかし彼女たち２人の説得が大変熱烈だったため、ついに籐四郎殿は折れて、あらゆる障害と困難を乗り越える決意をした。そして悔い改めのために司祭を、また説教のために修道士をかの地へ派遣してほしいと副管区長に手紙で要請した。ちょうどその頃暴君が畿内より肥後に派遣した５、６千人よりなる軍がその辺りを通過することになっていたので、司祭と修道士が道中で危険に会うことのないよう、マセンシアが手紙で対応策を知らせた。

マセンシアの希望によって、彼女の聴罪司祭であった修練院（ノヴィシャド）院長ペドロ・ラモン司祭と日本人ジョアン・デ・トーレス修道士が、ほぼ四旬節の終わり頃に支度をととのえ出発した。司祭は日本の医者[16]の扮装をして薬の入った革袋を弟子に運ばせ、修道士は在俗僧に見せかけて旅をした。彼らが久留米の城に着くと、籐四郎殿（シモン）は大いに歓迎し改めて教理を聞いて神に立ち返った。それのみでなく、城中の身分ある者のうち36人が説教を聞いて入信した。しかし籐四郎殿は戦のことで大変忙しかったので、それ以外の家中の者が説教を聞く余裕はなかった。このことは残念ではあったが、同様の機会が再び設けられることに望みがかけられた。

マセンシアとカテリーナ、さらに城中のすでにキリシタンであった者たちが告解をした。その中に一人の老人がいて、病のため真っ先に告解させてほしいと頼んだ。無事に告解を済ませるとしばらく火のそばに腰かけていたが、30分ばかり後に神のもとに霊魂を返した。

日本イエズス会の全員は籐四郎殿の回心を大変喜んだ。なぜなら今後神の御計らいによって西国キリスト教団の頼もしい柱となることが期待されたからだ。

五島列島について

五島の島々ではもう何年も前から[17]福音宣教が始められ立派なキリスト教団が作られていた。ところが相次ぐ戦や対立のために、かの地の殿は次第にデウスにまつわる事を嫌悪するようになっていた。イタリア人ジョゼ司祭[18]と日本人パウロ修道士（パウロ・ジャパン）がこの島々を訪ね、司祭が今年88年４月７日に書いてよこした手紙が以下である。

シナへジャンクが発った後、わたくしどもの滞在について殿の見解を尋ねましたところ、当地での滞在を認めるかどうかについてはこれから協議するつもりだとの返事を得ました。ところがその後何の指示も下されなかったので、この機会を利用して多くの住民に授洗したり、キリシタンの告解を聞いたりするために出かけました。修道士の方でも教理を授けたり、受洗や告解を促したりしてわたしを助けました。今日にいたるまでそのような活動を続けています。この活動からもたらされる利益は主に感謝を捧げるにふさわしいものです。

現在もキリシタンが住む島や土地への訪問を続けています。大変忙しく[19]また告解を聞くことも頻繁であるため、かろうじて祈りを捧げ食事をする間がある程度です。

これまでおよそ500人に授洗し500人の告解を聞いたと思われます。その結果信仰を固持してきた者もそれが揺らいでいた者も、互いに献身的に支え合うようになりました。住民は意欲的に祈りを覚え、わたくしたちが移動する時にはミサや説教を聞くために多くの者が従って来ます。製塩をする５つの村がキリシタンの拠点となりました。ここには異教徒は一人もおらず、すべての者が熱心に祈りを覚え教えをよく理解していることが分かります[20]。

今後新しい展開がありましたら、当地から出る船によってお知らせいたします。

1588年4月7日　小値賀 にて

島原について

日本人修道士ヴィセンテ[21]は、これまで主として高来の新改宗者への説教を担当してきたが、島原に戻ってからは教会を建て約50人の住民に洗礼を授けた。その結果集落全体がキリシタンとなり異教徒は一人もいなく

[16] ＜Wicki注16＞fizicoすなわちmédico（医者）：*Cartas*、前掲、245v。
[17] ＜Wicki注17＞*Cartas* 1.c.,248r「コスメ・デ・トレス神父の頃から」。
[18] ＜Wicki注18＞ Furnaletto。
[19] ＜Wicki注19＞校訂者脚注参照。
[20] ＜Wicki注20＞ cf. *Cartas* 前掲249v-250r。
[21] ＜Wicki注21＞ホウイン（法印）

なった。ただ仏僧のみが土地を去ったのである。その上驚くことには、ついに仏僧までも受洗し、さらに島原殿の祖母にあたる老女も説教を聞くことを希望して、よく理解した上で受洗したのだった。この老女がかつてどれほど教団を苦しめたかについては、ルイス・デ・アルメイダ司祭の古い手紙を読めばよく分かる。司祭がまだ修道士としてかの地で布教に努めていた頃、仏僧たちはこの老女[22]の唆しによってわれわれのことを悪しざまに言い、キリシタンの迫害に没頭したのだった。さらに昨年老女が有馬に滞在した折には次のような出来事もあった。老女の孫たちは既婚の高貴なキリシタンで、周囲の者たちの立派な鑑[23]となっていたのだが、祖母が高齢で間もなく永遠の罰が下されるであろうことを案じて、ぜひデウスの話に耳を傾け、キリシタンとなるようにと働きかけた。すると老女は激怒し彼女たちの説得を罵倒して次のように言った。「盲で道理の分からない愚か者たちよ！この度関白様がパードレや教会、キリシタンを迫害しているのは、これまでキリシタンがさんざん貶めてきた神様や仏様の天罰が下ったからなのだと、お分かりにならないのか？今こそパードレだのキリシタンだのに仕返しができてわたくしはしあわせだし、せいせいしているよ」。だがその言葉を発してから３カ月もたたない内に老女は態度を一変させ、自ら望んで説教を聞くようになり、過去の誤りを恥じ、悔い改めてキリシタンとなった。そして今ではデウスの言葉をぜひ聞くようにと異教徒にも勧めている。

暴君がわれわれ全員を国外に追い出そうとした今回の禁圧によって、デウスの教えはすぐにも諸国から消滅しようと敵は喜び勇み、悪魔も改宗を妨げるべく手を尽くした。だがこのような状況下でも、人間的な予想に反して、ドン・プロタジオの領地と大矢野の島々だけで昨年（　人が）入信し[24]、また同じように暴君の迫害を被ったにもかかわらず五島の島々でも１年前から今まで、つまり87年７月20日から88年７月までに（　　人が）キリシタンとなった[25]。

第３章

フランシスコ・グレイス（ガルセス）が贈り物を携えて大坂に行き、暴君を思いとどまらせようとした経緯について

もしナウ船がシナに出航した後にも、命令に反して司祭たちが日本に留まっていることを知れば、何事も意のままにと考える暴君が態度を急変させることは明らかだった。そこで何人かのイエズス会司祭、ナウ船の総司令官[1]とポルトガル人は、複数の日本人の意見も考慮して、次のような取り決めをした。まず総司令官が贈り物と手紙をもった使者を関白に遣わすこと。そして博多で関白から受けた歓待について礼を言うこと。その上で総司令官のナウは小さく船室も狭い上に、すでにシナで商人に貸し切られてしまっていたため、多くの司祭と修道士を残らず乗せる余裕がなかったことを述べて、一部の者は来年のナウ船の出航まで日本に留まる旨を伝えること。

この使命を果たすためにフランシスコ・ガルセスが選ばれた。彼は身分あるインドの兵士で、高齢・有徳の士であり、われわれの会とも親しく、数年前から日本に暮らしていた。われわれの教会でよく秘蹟を受けており、明敏で慎重な男でもあった[2]。

また通訳として彼に同行するために長崎のあるキリシタンが選ばれた。彼は既婚で長崎の住民であり、このような使命のために日本で探しうる最良の信者の一人だった。なぜなら会の功労者であり、聡明で顔が広く、さらによきキリシタンとして教団の利益のためわれわれの主に命を捧げる覚悟があった。

以上の者は告解して打ち合わせをした後に、ナウ船がシナに発つ７日か８日前に平戸を出発した。

贈り物はイエズス会が用意したが、総司令官の名義とされ、彼の手紙と伝言が付された。

---

[22]＜Wicki注22＞名前はショウシュンといった。老女については第1部46章で「24年後キリシタンとなった」と述べられ、また49、51、71章でも触れられている。
[23]＜Wicki注23＞校訂者脚注参照。
[24]＜Wicki注24＞Cf. Vol.4, 63章。
[25]＜Wicki注25＞テキスト・書簡集（*Cartas* 前掲243r- 246r）ともに数字が脱落。

[1]＜Wicki注１＞ドミンゴス・モンテイロ（*Cartas* 前掲235r; Schutte, *Introductio* 123-124）
[2]＜Wicki注２＞Cf. Shutte 922

３月21日オルガンティーノ司祭は潜伏していた小豆島の室生でフランシスコ・ガルセスと落ち合った。そこから２人は一緒にジョルジ・弥平次の領地である野瀬[3]へと船で向かい、そこで必要なことを協議した後、２名の使者をすぐに堺と都のキリシタンへの連絡へと向かわせた。さらに関白の弟の美濃殿に、関白との間の仲立ちを要請することとなり、フランシスコ・ガルセスがこの役目を引き受けた。その際、これまでにさんざん出費したあげく何も贈り物をしないのはそぐわなく思われたので、10カテ[4]の白の絹撚糸入り小箱を捧げることになった。贈り物には書状はつけず、ただ「司祭たちより美濃殿へ」という上書きのみが記された。そして捧げる際には、下地方から来る時に持参したものはこれだけだったとフランシスコ・ガルセスが伝えることになった。このように取り決めた理由は、そうしなければ美濃殿が関白に取り次いでくれない恐れがあるからで、また兄の前で好意的に口を利いてほしいというこちらの意図を汲んでほしいからでもあった。

３月７日[5]にフランシスコ・ガルセスは大坂に着き、総司令官からの預かり物として白絹50カテ、さらに絹撚糸入りの小箱も持って美濃殿を訪ねた。美濃殿は大いに歓迎して、自分がフランシスコ・ガルセスを関白に引き合わせようと申し出た。

翌８日、フランシスコ・ガルセスは暴君を訪ねた。暴君は威圧的な態度で、訪問者に過大な恩恵を与えているということを示すために、大坂城外の堀を見下ろす場所を接見地として指定した。また威容を誇示するためにひときわいかめしく椅子に座ったまま面会することを望んだ。面会は工事に携わる膨大な数の工夫の前で行われたが、秀吉自身の付き人はせいぜい６・７人だった。

贈り物を捧げたところ、一瞥してうれしそうな顔をした。そして、どの司令官の使節か、ナウ船かジャンク船かと訊ねた。アントニオ・デ・アブレウがナウだと答えると、暴君はすぐ司祭達について「これまでどこに潜んでいたか、もう全員いなくなったか」と質問を始めた。それにたいしてアントニオ・デ・アブレウは次のように答えた。「ナウはわたしどもが出発した時ちょうど出航準備をしていました。船には乗せられるだけの者を乗せ、残りは今年来る別便に乗せるようとり決められました。ただし関白様の命令を憚って、あちこちの山地や荒野などに分かれて潜んでいます。そして閣下のような偉大な支配者の素晴らしい治世に日本を離れることを心より無念に思っています。」

ここまで大変よどみなくまた意図するところを的確に話したため、聴衆には異教徒しかいなかったにも関わらず、一様にわたしたちに同情した。そして「伴天連たちは戻ってもよかろう」と暴君が言うことを予期しない者はいなかった。だが案に相違して暴君は次のように言った。伴天連は一人の例外なく日本を立ち去るべきである。ナウについてはどこに寄港してもよいし、寄港先で危害が加えられることのないよう配慮もしよう。だがこと伴天連に関しては断じて日本に居残ってはならない。

アントニオ・デ・アブレウは再度「ポルトガル人は航海の際に必ず２、３人のパードレ様を伴うのが常です。ですからそれにならって日本に来るナウ船にもパードレ様が２・３人乗ることをお許しいただきたい」と主張した。それにたいして暴君は「それすらまかりならぬ。なぜなら伴天連は日本の神々の社を破壊したが、それは日本国の根っこを破壊したに等しいからだ。神こそが日本の主に他ならず、日本の主は神に他ならない。それゆえ神々に反するバテレンたちの法は日本の主に反することになるのだから、如何なる理由によっても伴天連が日本に居残ることは許すまい。」と言った。さらに「もし命令通り立ち去らなければ死罪を命じよう。この点に関してわたしにインド人のような抜かりはない。どこであろうと見つけ次第死刑に処すので心するように。ただしポルトガルの商人については、来日しても構わないし、日本から商売のためにインドに出かけて行くこともあろう。伴天連の法は南蛮（すなわちインドのこと）にとってはよいものであっても、日本にとってはそうではない。したがって今後そなたたちはそなたたちの法に従い、日本人は日本の法に従うのがよかろう」と答えた。

これらのことを話している間も立腹している様子は見えず、さらに見当外れのことも話し始めた。すなわち日本の主たる財産は牛馬であり、馬は戦や交通に、牛は農耕に用いられる。だが牛馬を食する伴天連たちがこのまま日本に居残れば、これらの動物は早晩絶滅してしまうだろう。このことからも伴天連を日本に留まらせるわけにいかないことは明白だ、云々。

---

[3] ＜Wicki注３＞YonoとTakayamaの間。
[4] ＜Wicki注４＞１cate（カテ）はおよそ１libra。
[5] ＜Wicki注５＞1588年。SHUTTE、*Introductio* 123によればこの訪問は３月８日、p.922によれば３月６日。

敬虔なキリシタンで、教会の忠実なる僕で友でもあるアントニオ・デ・アブレウは、暴君に盾ついたり無鉄砲な口を利いたりする者はないとよく承知していたが、臆せずにデウスを信頼して次のように言った。パードレ様は外国人ですから、国内に敵が多数いるのは当然のことです。そしてそのような敵がパードレ様を悪く言ったり教えについて誤ったことを伝えたりして、閣下の前で誹謗中傷したこともあったでしょう。ですがそのような反対勢力の言うこと全てが真実ではありません。パードレ様たちは何よりもそのことで胸を痛め悲しんでおられます。

アントニオ・デ・アブレウはこれらの内容を大変巧みにまた説得力をもって伝えたので、彼のことを称賛しない聴衆はいなかった。これには暴君までが感心して、一体どこの国の者か、どうやってポルトガル人の言葉をここまでよく習得したのかと尋ねたほどだった。

辞去する際暴君は城全体を案内させるように命じ、フランシスコ・ガルセスには身分に見合った余り価値の高くない絹の着物を２枚、アントニオ・デ・アブレウにも同様の着物を１枚与えた。このような回答とともに使節はひき返した。

オルガンティーノ司祭が本年1588年３月３日に小豆島で記した書簡の写し

閣下と、また下地方に集まっているたくさんの者の労苦を思い、夜も寝られず日中も様々な憂慮と苦しみの内に過ぎます。地獄の悪魔たちが今この瞬間にも軍を引き連れて肥後に向かっているというのに、その策略から身をお守りになる術がこちらでは分からないのですからなおさらのことです。詳しい情報が入ってくるにつれて悪魔たちの意図がはっきりとしてきました。彼らはかの地にいる司祭たちを大いに辱め、司祭たちが生存のために保持している物まで略奪しようと心に決めて下（しも）に向かっています。これら有力者たちの悪意は暴君の手本によって極みに達し、いかなる分別も良識も感じとることができません。その上ひたすらに我が身の利益のみを考え、肉親や友人のことさえ忘れ果てている様子は、まるで一度も物事の理をわきまえたことがないかのようです。このような様子ですからわれわれの事情など顧みられることはないでしょう。その様はあたかも地獄の悪魔の破廉恥や悪意が地上に噴出しているかのようです。

暴君の野卑さや卑劣さについて日々耳に入ってきますが、その内容には呆れかえるしかありません。彼は唾棄すべき汚らしいものの化身です。こうでも表現しなければ彼について例えることも話すことさえもできないのです。彼の欲望はあまりに肥大化して、その場の厳粛さや立場にあった振舞いについてわきまえないだけでなく、人間としての本来的な尊厳さえも忘れ果てているのです。ですから人間と呼ぶに値せず、獣にも劣ると言わねばならないでしょう。他人への配慮は、どのような立場にある者にたいしても皆無で、ありとあらゆる者を恥ずかしめ金銀を巻きあげます。そうでなければ理由もなく住む土地から追い出して、領地や年貢を奪います。それらは全て他人の物を自分の物とするためなのです。このような方法で毎年４コント近くの米俵を金に替えて蔵にしまいこみます。その上に、毎年同じくらいの財貨を国主の子弟や大名らが贈り物として彼に捧げます。これは彼らの自発的な贈り物ではなく、ひとえに暴君の機嫌を取って自らの破滅を防ぐためなのです。この不運で不幸な暴君は、世継となる息子も娘もないままに52歳を迎えました[6]。不当にまた権力をかさに着て周囲の者から取り上げた品々について、ここでは一つ一つ記しませんが、その量は莫大なものです。

彼の恥知らずな好色は限度を知らず、すべての所有する城は売春宿[7]となりはて、年頃で少しでも見目のよい女は一人残らず彼の餌食とされました。主君である信長の娘二人も彼の妾にされました。１人は越前国領主柴田殿の息子の妻[8]で、舅は彼に殺されました。もう一人は５カ国を治める家康の息子の妻[9]です。家康は秀吉が今最も恐れる敵の１人です。また御本所[10]といって信長の息子がいますが、彼の娘も同じ目に会いました。その他信長の側室で器量のよい者はみな同じ憂き目にあいました。また信長の嫡子城之介殿[11]は信長と一緒に殺されましたが、彼の妻も同じ運命をたどりました。

暴君は主だった貴人の娘たちを養女とし、彼女たちが12歳になると自分の妾とします。有力大名の娘で器量がよいとの噂が暴君の耳に入った者で呼び寄せられない者はいません。このような売春事業の手配師はアマンデ

[6] ＜Wicki注６＞秀吉は1536年に生まれた。よって1588年には52歳。
[7] ＜Wicki注７＞prostíbuloの誤写。（原文: postribulo）
[8] ＜Wicki注８＞柴田勝家の長女（勝家の妻は信長の妹）は秀吉と結婚した。淀君として大変よく知られた女性である（PAPINOT 562）。
▲注８、９については本文34頁を参照のこと
[9] ＜Wicki注９＞千姫（秀忠の娘）（同上書667）。
[10] ＜Wicki注10＞織田秀勝（1567～1593）。秀吉の養子となり羽柴秀勝と呼ばれる（同上書469）。※本文参照、織田信雄が正しい。
[11] ＜Wicki注11＞織田信忠（～1582）（同上書468）。

トクウン[12]と言って、既に70近く、かつてはわれわれの最大の敵比叡山の坊主でした。彼は都に壮大な宮殿を複数建てこれを暴君の売春宿として使っています。公家[13]の娘、つまり内裏の貴人の娘でさえこのトクウンに呼び出されれば拒むことができないのです。これ以上続ける必要があるでしょうか？このような権力乱用が当たり前となった結果、貴人たちは地位を守るためにすすんで娘を暴君に差し出すほどになりました。

この暴君が都に壮大な宮殿を建てることによって、すべての大名に与えている前例のない屈辱についてはどうでしょう。この宮殿は豪華さと費用において先の大坂城をはるかに凌ぐもので、いかなる大名の歳入もこのような支出をカバーすることはできません。そのため彼らは負債を負い、さらに邸や城内での工事への参加も強いられるのです。都の城はほぼ完成に近付いていますが、現在都から３レグア程離れた淀川のほとりに淀城[14]を建設中で、そこでも同様の犠牲が課されています。そこでは５万人以上が工事に従事しています。

大坂では他にも工事が進行中で、際限なく支払い不能な出費のためにすべての者が血の汗を流しています。このことがさらに庶民にたいして権力が振りかざされ恥辱が与えられる原因となっているのです。

気の毒な堺の国とその住民も法外かつ頻繁な辱めと強制によって屈辱を受けています。都と堺に住むいくらかでも裕福な見かけの者は、暴君が都外に建てている新しい宮殿の近くに家を建て移住するよう命じられています。このように身分の高い者から低い者までみな一様におびえています。日々の労働と勤勉により日銭を稼ぎ、家族を養わなければならない職人さえ、気の毒なことに、何の賞与も日当もなく工事に動員されています。

暴君の貪欲について日々新しい情報が耳に入ってきます。数日前には薪炭をとるための山が取り上げられました。そのためそれを生活の糧としていた哀れな百姓や貧乏人たちは路頭に迷い、家族もろとも途方にくれているそうです。

すべての者がわれわれのことを信用し、またわれわれの逆境と苦悩に大きな哀れみを示しているのは、主が尊い御旗のもとにこれら諸国を結束させることを望んでおられる大いなる証左だと理解しています。なぜならわれわれの回復以外のことは誰も話題にしないほどだからです。われわれは神に身を捧げた修道者として、教皇閣下とフェリペ国王閣下に現状をお伝えして、本事業のため、またこれまで獲得し現在も獲得しつつある霊魂の救済のためのお力添えをお願いするしかありません。けれどそれさえも、われわれの主デウスがこの日本教会を殉教と迫害の道を通して創設することを望んではおられないと仮定してのことです。このような偉大な事業についてはデウスのみが御存じです。われわれの覚悟はこの逆境においてとうに固まっております。どうか尊い御心のままにわれわれをお使い下さいますよう。

丹後の領主ガラシャ（＊グラシア）の近況についてもお話ししましょう。彼女は昨年大変な熱意をもって、これまでと全く違うやり方で洗礼を受けました。デウスは自らお選びになった者を燃えさかる火の試練の中にお試しになるのが習いでありますから、彼女に起こったことを簡単に述べることといたしましょう。

彼女の夫である越中殿は、大坂に移って来る前からすでに暴君の悪行により影響を受けており、それを手本として以前にもまして残酷で腹黒い異教徒となっていたようでした。ある時キリシタンで越中殿の息子を育てていた乳母のちょっとしたしくじりを理由として、その女の耳と鼻をそいで追い出すように命じました。ガラシャは大変心を痛め、キリシタンであるから、秘密裏に彼女の面倒を見させました。ガラシャ自身は侍女たちとともによく信仰を守っていました。このようにして夫の到着後10日間は夫婦間にこれといった問題はありませんでした。けれども越中殿が次第にガラシャの大きな変化に気がつくにつれ、悪魔が彼に入りこんで支配を始め、妻の謙虚さや徳を悪用してむやみと誘惑したぶらかすようにしたため、彼女の心は慰められることがなくなりました。修道士コスメは世俗の僧の格好をしてこっそり都を訪ねました。そして面会こそできませんでしたが、伝言や手紙によってガラシャを励まし課された試練を耐え忍ぶよう力づけました。けれどもよこしまな異教徒はさらなる切迫した、また人間の本性に反する誘惑やまやかしを仕掛けました。彼女はわたしに「大罪を犯すことなく夫と離縁することができるでしょうか」と訊ねてきました。夫は常時５人の側室を側におきたいと言っているのです。

彼女がキリシタンであることはまだ気がつかれていません。なぜなら彼女の行き届いた処遇と褒美によって召使はみな彼女に味方しており、また彼女に愛情ももっていたので、秘密を固持していたからです。ですがもし離

[12]＜Wicki注12＞トクウンについては第４巻53章参照。
[13]＜Wicki注13＞ Cf. 第４巻62章。
[14]＜Wicki注14＞秀吉の第１側室の知行地または住居（PAPINOT 752）。

婚すればいずれは明るみに出ましょう。また彼女は王国の真のまた生来の領主なので、場合によって拠りどころをなくす可能性もあります。

都に孫四郎殿[15]というキリシタンがいました。徳が高く神の前に誠実でわれわれの親しい友人でした。丹後出身のマリアというよき女性と結婚していました。立派なキリシタンでしたからガラシャは彼らを信頼し、伝言を通じて彼らに頼っていました。ある時ガラシャは孫四郎殿に「わたしは救いを求めていますが、パードレ様方はわたしをお見捨てになるのでしょうか」と人づてに訊ねさせました。孫四郎殿は、「パードレ様方のお力の届く限り、教会が奥方様をお見捨てになることはないでしょう」と答えました。

数日前のこと、ガラシャの夫はマリア―家政をとりしきっていて、ガラシャを受洗させた女―ともう一人の侍女を呼びつけ、侍女頭（ルイザといって初期にキリシタンとなった女の1人。まだ若く美しかった）を彼のもとに連れてくるよう命じました。そして従わなければ彼女の耳と鼻を切り落とすと言って脅しましたが、これはルイザを辱めるためでした。女たちはどうすればよいかを話し合って娘を逃がすことに決めました。けれどもルイザは丹後の出身だったのでどこに逃せばよいか分からず、人づてに都の孫四郎殿に事情を知らせて助けられるかどうかを訊ねさせました。孫四郎殿は「何とかいたしましょう。こちらにおよこしなさい」と答えて実際にそのようにしました。ガラシャと他の侍女たちは越中殿に宛てた手紙をルイザに書かせました。その中で越中殿のことを、高貴で天賦の才に恵まれた奥方がありながら侍女と関係をもちたがる下劣で野卑な男と呼び、その他にも殿の顔色を失わせ怒りに火をつけさせるような内容を記させました。書き終わるとルイザをキリシタンの家に逃しました。

午後になって帰宅すると、越中殿は案の定ルイザを呼びつけました。女たちは素知らぬふりをして「具合が悪く身内の者と医者に行きました」とだけ答えておいて手紙を渡しました。越中殿は読み始めるとすぐ嘲りに気がつき、最後まで読みとおすことはできずに破り捨てました。このようにして悪魔は罠にかかったのです。

孫四郎殿はルイザを上京にある彼の家に送り越前出身のよきキリシタンに世話を託しました。けれどもガラシャは修道士コスメに使いをやって、高齢で身分の高い別のキリシタンの家にルイザを移すよう依頼しました。老人の妻マリアが大変善人だったのでより安全に隠れていられるからです。このようにして万端がととのいましたが、この出来事からも悪魔が崇高な事業を妨害するためにあらゆる策を講じることが分かります。

「もしガラシャ様が夫君の度重なる侮辱に耐えかねて、家と領地を捨てて身を寄せていらっしゃったらどうすればよいでしょう」と孫四郎殿がわたしに訊ねてよこしました。ガラシャは孫四郎殿のことを頼っていましたが、彼のような庶民が一国の主をかくまうことは分不相応で、死の危険を間近に引き寄せることだったからです。ですが彼は真のキリシタンで、死の覚悟もできているため次のようにも言いました「デウス様にお仕えするためにならパードレ様がおっしゃるとおりのことをいたしましょう。この逆境の中でわが子や身代のことはもはや念頭になく、ただデウス様のお喜びになることをするだけがわたしどもの望みなのですから」。この若い男性についてわたしが知りえたことはすばらしいことばかりです。彼とその妻は絶え間ない殉教の危険にさらされており、五畿内のキリシタンたちはみなそのすばらしい手本に感銘を受けています。そして彼らの方でも絶えず口に死を唱え、ただの一人にもキリストへの愛のために死ぬことより他の関心事を見出すことはできないのです。主よ、あなたを賛美いたします。現下の苦しみは、われわれ全員への貴重な財産です。どうか主が常にわれわれのことをこのようにお使い下さいますように。主キリストの御名のもとでの苦難に耐えるときにこそ、われわれは最もよく学ぶことができるのですから。

1588年３月３日　ここ小豆島にて

第４章

オルガンティーノ司祭が記した他の書簡

「もし暴君がわたしたちを惑わそうとすれば死を選ぶ心づもりですから、お側にいて下さると心が安らぎます。どうかぜひ五畿内にいらして下さい」。都のキリシタンたちがそのように伝えてきました。それにたいしてわたしは「身を潜められる隠れ家を用意して下さい。そちらに参りましょう」と答えました。ここにいることは大変困難で、これまでの経験から言って、一体誰にこのようなことを任せられようかと思います 。なぜなら暴君はすぐ目の前で睨みをきかしていますし、いくら考えても予測しえないことが常に起こりうるのです。よほどの気骨のある人間でない限り大変な労苦と苦悩にさらされることでしょう。

今晩アゴスチーニョ[1]から聞いた話では、官兵衛殿が

[15]＜Wicki注15＞ Magoshirodono?（原文: Mangoxirodono）。

[1]＜Wicki注1＞小西行長、アゴスチーニョ。

彼に次のように言ったそうです。関白の弟の美濃殿が暴君の言いつけで、ジュスト右近殿を、「できる限り条件のよい場所に封禄として６万俵取らせようから配下に入るように」と言って呼びつけたそうだと。わたしは右近殿と直接この件について話しましたが、彼はこの話にはまったく関心をもっておらず、ただデウスに仕え霊魂の救いに努める以外の気持ちを彼に見出すことはできませんでした。わたしの見立てでは、暴君たちの意図は右近殿を坂東の戦の最前線に送り、そこでも死ななければまた追放することにあるのでしょう。ですがいくら呼びよせたところで彼らが相互の理解に達することはないでしょう。右近殿はきわめて徳の高いことが見受けらますので、主デウスが偉大な事業のために彼をお選びになっていると思われます。

関東[2]は日毎に戦闘態勢に入っており、暴君と和解することはまずないでしょう。今度こそサタンが滅亡することを主に期待いたします。なぜなら彼は以前の信長よりもさらに増長して自分を神の一人とみなすほどになっているからです。そして考え得る限りの悪行をつくさなければ気がすまないがごとく、内裏の母親までも妾にしました。

大坂や淀[3]、都で暴君が指図する工事により、ありとあらゆる者が苦しむ様は前例がありません。すべての者が困窮し、負債を抱え、また財物を抵当にとられています。また兵士たちは空腹に耐えきれず持ち物を売り払ってしまったため、生き延びるために都や近辺の街道で公然と奇怪な強盗をはたらいています。さらに多数の者は、主人が日に４カイシャ[4]しか給金を与えないので、逃げ出しています。あらゆる者は例外なく声をあげ暴君の世に終わりをと訴えていますが、当の本人はこれを少しも気にかけていません。それどころか力のある者が苦しみ辛酸をなめ窮乏するのを見て、なおのこと自惚れ、彼らにたいする圧政の手綱を緩めることはないのです。一体誰が神の定めを知り得ましょう！[5] 日々誰かが苦しむことがわれわれが共感を得る理由となるのです。事態が切迫し、いつ予期しないことが起こるか分からない状況なので、百姓たちについてはもはやここでは述べません。幸いなことにわれわれは長期間耐え忍ぶことを心に決めています。そうすれば道を誤ることはないからです。

逆境というものの実際は、思索して想像されるものからは遠く隔たっていることをどうかご理解下さい。わたしはこの都に着いて以来、できる限り潜んで行動するようにしていますが、今は告解の時期[6]で霊魂に導きを与えるべき時ですから、必定多くの危険をおかすことになっています。それにいくら内密に行動しても、われわれに悪意をもっている人間がいれば、その人間がわれわれを告発することまで防ぐことはできません。 ですがこれこそが主イエスキリストと使徒たちがわれわれに示し下さった道であることを思うと心が慰められます。

尾張のコンスタンティーノに使いをやったところ、彼は聖土曜日[7]にやってきました。そしてかの地のキリシタンが花正村[8]の役人から受けた厳しい迫害について報告してくれました。それによるとこの役人は祭壇を破壊し代わりに多くの偶像をそこに並べたということです。ですがこのよき老人コンスタンティーノは、それらを一つずつこっそり焼き捨てています。かの地のキリシタンたちはついに彼の激励により立ち上がりましたが、教会に一堂に会することはできていません。また悪魔はコンスタンティーノの所有する祈りのための数珠も没収しようとしましたが、この男は「まず自分を打ち首にして、それから好きにするがよい」と答えたそうです。このような迫害に関わらずただの一人も裏切る者はなく、それどころかこのような困難な時にあってコンスタンティーノは一人の大変身分の高い貴人をわたしたちの宗旨に改宗させました。どうか主に栄光があられますように。

当地の主だったキリシタンが、彼の滞在中わたしが書かせた２通の手紙によってどれほど慰められたかについては言葉では表現できないほどです。

昨日コンスタンティーノと別れ、わたしからも尾張のキリシタンへ再度手紙を書いて託しました。手紙ではどうやってこの都まで潜んで来たかについても知らせました。

盲人トビアスについて[9]はすでに昨年の出来事を知らせた際にお話ししたかと思います。彼は今年になって美濃を訪れ各地で説教を行い、一カ所だけで35人も改宗させたそうです。また領主は異教徒ですが、トビアスのために教会堂を建て、彼がその地に住むなら食べ物を与えて扶持してもよいとまで言ったそうです。

---

[2]＜Wicki注２＞箱根の関所を越えた東側の地域。戦とは小田原の北条氏との戦のこと。

[3]＜Wicki注３＞山城の国。秀吉はこの淀の知行権を第１側室に与えたため、彼女は淀君・淀殿と呼ばれた。Cf.　前章注14も参照。

[4]＜Wicki注４＞caixa　とるにたらない銭貨。

[5]＜Wicki注５＞新訳ローマの信徒への手紙11,33。

[6]＜Wicki注６＞すなわち四旬節。

[7]＜Wicki注７＞1588年４月16日。

[8]＜Wicki注８＞*Cartas* 1598 II, 257v。花正村については既出（第１部96章）。

[9]＜Wicki注９＞*Cartas* 前掲、258r。そこでもオルガンティーノ司祭は次のように述べている「彼については昨年述べましたが‥」cf. 第４巻59章。

老サンガドノ（キリシタン名サンチョ）はこの数カ月間近江にいて、かの地のキリシタンを大いに慰めました（彼は信長時代近江に幽閉されており、その間住人にキリスト教を伝えて入信させたのでした）。日ごとに近江の住民は力を得て、一所に集まって 互いに慰めあうようになりました。その中のリーダー格の一人が告解と聖体拝領のためにわたしのところにやって来ましたが、聖土曜日には仲間と共に復活祭を迎えるために近江に帰って行きました。

ガラシャにはわたしが都に来ていることを復活祭の日[10]に知らせました。彼女は困難にさらされ続けながら[11]、目下のところ信仰を守り、忍耐の徳を練磨しています。ですがこの先どうなるであろうかは予測できません。悪魔の妨害と、彼女の夫が妻を苛むために用いる誘惑が大変手強いからです。どうか主が彼女に辛抱を与えたまわんことを。

1588年４月19日都より[12]

同じくオルガンティーノ司祭が記した５月６日付書簡

この数日間ガラシャの家の者たちを落ち着かせるために骨を折っていました。彼女が夫との離縁に向けて気持ちを固めているために、これら家中の者たちは絶望の淵に追いこまれているからです。夫が５人の側室を公然と家に置くようになったためガラシャは耐え難い誘惑を受けており、さらに夫に虐げられ辱められてもいるのです。また悪魔の方でも彼女を追い詰め、これほど多くの障害や悲嘆が夫よりもたらされる場所にて、魂の救済を求めるのは不可能なことだと彼女に思いこませようとしています。彼女はそれについてわたしに手紙を書きましたが、その手紙はわたしを大いに苦しめました。そこには「パードレ様たちのいらっしゃる西国に参りたい」との彼女の希望までが記されていたのですから、なおさらのことです。もしそのような展開になれば即座に現下の迫害にさらなる火が加えられ、短期間にすべてが破滅を迎えることは間違いありません。そのため五畿内のキリシタンたちも非常に胸を痛めていました。

何とかして彼女の決意をひるがえさせようと、使いをやったり手紙を書いたりして大変な苦労を重ねましたが、最後に主の助けによって、わたしがジェルソンを引用して伝えたいくつかの言葉のうちの一つを彼女は理解してくれました。その一つというのは「一つの十字架より逃れる者は必ずより大きな十字架に遭遇する」[13]というものです。その言葉によってようやく落ち着きを取り戻し、手紙や伝言の内容から言ってもうあれほど動揺することはないと思われます。われわれの主デウスが彼女の霊魂に大いなる恵みをお与えになったことは確かです。手紙の内容はここで公開すべきでないと思われますので記しませんが、ふさわしい時期が来ればまたお伝えしようと思います。どうか主が尊い事業の実現のために彼女という、このふさわしい道具をお使い下さいますよう。

わたしが都に参りましたのも、一つには彼女の霊魂への愛からです。この霊魂を守ることがわれわれによい結果をもたらしましょうし、逆に見放せばわれわれ全員を大きな危難に陥れることになりましょう。なぜなら彼女は身分が高いため、われわれ全員が彼女の庇護をよくよく主に祈願する必要があるからです。もしあちらの地方から彼女に助言や励ましの手紙が送られるなら（もとより彼女はそれを望んでいるのですが）、必ずわたし宛とし、他の人間を介することはないようにして下さい。露見を防ぎたいからです。細心の注意を払ってわたしが送り届けましょう（といってもわたしはまだ彼女に会ったことはなく、他の司祭も彼女と話したことがないのですが）。なぜこのようなことを申しますかといいますと、関白の女衒トクウンが（全くの利己的な理由から）暴君の前で彼女の夫の庇護者となっており、何気ない一言をこの男が耳にしただけで、この五畿内すべてが混乱に陥る[14]可能性があるからです。ですからガラシャもこの点については大変注意深くふるまっています。もし妻や侍女たちがキリシタンであることに気がつけば、越中殿は自身の出陣中に彼女たちが家を出たことも察するでしょうし、それはどうあっても許し難いことですから、いかなる情けも妻にかけることはないでしょう。

ガラシャは大変よくできたキリシタンの未亡人を側において、昼も夜も従わせています。そしてこのよき婦人をこのように大切にすることについては夫の承諾も得ています。未亡人がキリシタンであることを彼女の夫も了解していることを考えると、最後の最後にはガラシャの忍耐が勝利し、夫の目が開かれ、われわれの聖なる教えに耳を傾ける日が来ることが待ち望まれるのです。

この都に着いた日（闇の水曜日[15]でした）、ちょうど５カ国の領主である家康も1000人の兵士や総司令官、そ

[10] ＜Wicki注10＞1588年４月17日。
[11] ＜Wicki注11＞*Cartas* I。Cf. Eccli, 27, 6。
[12] ＜Wicki注12＞刊行された書簡では日付が脱落。
[13] ＜Wicki注13＞*Imitatio Christi*, 2巻, 12章３。Cf.　第４巻62章。
[14] ＜Wicki注14＞校訂者脚注参照。
[15] ＜Wicki注15＞1588年４月13日。

れにその息子たちを引き連れて都にやってきました。暴君は礼をつくして彼らを饗応し、毎日のように連れ立って狩りに出かけたりごく内輪で訪問しあったりしています。それを見て庶民は次のように言っています。家康がなんらかの男気を示さないのは計算高さの表れなのだろうと。

坂東との戦は７つ目の月[16]に宣戦布告が出されました。坂東の北条殿[17]は家康の領国に侵入しつつあり、それは暴君にとってもうれしい知らせではないはずです。

このルシフェール的暴君の強烈な願いは日本の偶像となって後の世まで語り継がれたいということです。そのために他の人間や事物について何ら慮ることなく、ただひたすら勢威を拡大し名を世間に広めるために人間に可能なあらゆることを実行しています。

暴君は従来の都よりも大きく、白塗りの美しい家の立並ぶ新しい都を造営しています。そこには内外に大きく美しい御殿があります。その様子はといえば、信長の造った安土山の建物（日本の基準から言えばすばらしいものでした）や暴君自身が造った大坂の建物（信長のものをも上回るものでした）も、この新しい都の建造物と比べれば取るに足らないと思われるほどです。国主の子弟も有力大名も弱小大名もこぞって屋敷を普請し、しかも彼らの財力以上のものを建てるために困窮しています（が、それこそが暴君の意図するところなのです）。また徐々にではありますが多数の新しい公家が生まれつつあります。暴君がそれらの新公家を古くからの公家と同列に、あるいは彼らより上位に扱うので、血筋と世襲によって成り立つ古くからの公家は排除されつつあります。暴君はこうした新興公家の支えによって内裏、つまり日本の絶対君主になろうとしているのです。もしわれわれの主デウスが彼の野心の翼を断ち切らなければ、の話ですが。

彼はまた彼の一族が天下に君臨し続けるのを妨げるであろう障害物を確実に除去しています。少しでも勇気や気概のある者は追放され、つまらない無知を誇る輩のみが重用されています。このような状況ですから右近殿のことは、趣味の茶の湯につきあわせるためでなければ暴君が認めないことは間違いありません。またわれわれのことを認めないことも確実です。なぜならわれわれの聖なる教えはあらゆる偶像崇拝に真っ向から反対していますが、この男と言えば新しい天照の君[18]となることで偶像崇拝の頭目になろうとしているのです。さらに誇示している権力と富、また日本では前代未聞の絢爛豪華な建物から見て、おそらく天照よりも上位に立とうとしているのでしょう。

よしんば国王フェリペ閣下[19]が日本を直々に訪問なさったとしても、われわれの回復について暴君といかなる合意に達することもないでしょう。まして使節によってあげられる成果は皆無と思われます。ここから結論されるのは、下賤の卑しい出で逸楽にふけりながら、自ら崇拝されんがためにデウスの教会を迫害するこの男にたいして、国王閣下は戦争をしかけて破滅させるに十分な理由があると思われます[20]。さらに上記の野望へのこの男の執着が大変根強いことを考えますと、もしわれわれが命令に反して留まっていることを知れば必ずや態度を豹変させることが予想されます。ですから全てのキリシタンやわれわれと親しい異教徒が語っているように、デウスの思し召しによって事態が好転するまでは、できる限り身を潜める努力をするのがよいでしょう。

暴君がこれまで10カ月の間[21]、都・大坂や堺にあるわれわれの家や教会に手を触れず、ただ見張りを置き掃除をさせるにとどめていたことは、われわれに大きな疑念を抱かせました。ですが今やこの疑念は払拭されました。都の家と教会を解体して淀城に運ぶよう命令が下されたからです。堺の家や大坂の家と教会についても同様の指示が下されるだろうと噂されています。

このように暴君の本性が明らかとなり、デウスの教えにたいする真の宿敵であり、教えを消滅させ破壊させようとしていることがよく分かりました。ですからわれわれの方でも今後この件について金輪際ぶれることなく、策略にはまって捕えられることが断じてないよう、最大限の努力をはらわなければなりません。暴君は生存中も死後も崇拝されようとしています。デウスがこの男にどのような罰をお定めか分かりませんが、われわれとしましては聖なる閣下がお望みの時に、身をもってお仕えす

[16] ＜Wicki注16＞1588年８月～９月。

[17] ＜Wicki注17＞氏直（1562-1591）、氏政（1538-1590）の息子。氏政はしばし抵抗を試みた後に秀吉によって腹切りを命じられた。息子は高野山に追放され翌年死亡した（PAPINOT 170-171）。

[18] ＜Wicki注18＞天照皇太神、天照大御神（PAPINOT 14）。

[19] ＜Wicki注19＞スペイン・ポルトガル国王フェリペ。

[20] ＜Wicki注20＞戦争をしかける権利、特に教会の迫害者にたいして戦争を行う権利については *Documenta Indica* VIII,675-679参 照（モノモタパ王国の場合）。オルガンティーノが書簡を書いたことに注意。

[21] ＜Wicki注21＞1587年７月24日以来。

る覚悟をもつ以外にできることはありません。

われわれの仲間がシナに発たなかったと聞いて心から安堵しています。なぜならこのように貴重な折、シナやインド・ローマから日本に来るのによい機会であっても、日本からこれらの土地に去って行くべき時ではないからです。もし暴君があと２年も生きるならキリシタンと司祭に激しい迫害を加えることでしょう。ですからこの日本教会にはそのための基礎が築かれてしかるべき時だと思われます。主よ、そのためにわれわれをお選び下さったことを心より感謝いたします。われわれは尊きご意思に身をもってお応えする気持ちでいますので、どうか聖なる事業への奉仕をわれわれにお命じ下さいますよう。

当地のキリシタンの大半の告解を聞き、そこここでミサをあげて秘蹟をほどこしました。夜には彼らとともに祈り力づけています。どうか主よ、大いなる喜びをもってこれらに取組むわたしのひたむきな気持ちをお受け入れ下さいますように。

われわれも当地のキリシタンも見つからないよう張りつめて過ごしています。なぜならもし見つかれば、暴君がわたしを見逃すことはないからです。明日ここより近江に向けて発ちますが、わたしの籠を運ぶ人夫[22]にさえ悟られないように移動します[23]。それが目下のわれわれの最大の仕事です。初期教会の聖人たちの模範、それに倣うことをわれわれに課す職務の尊さ、そしてキリストへの愛のために大きな苦しみに甘んじたイギリス[24]やドイツ[25]の司祭達の尊い手本を想い起こして奮起しあっています。

数日前の夜よき老人チュウアン[26]とその妻マリアを訪ねました。全く予期していない折にわたしを見て彼らがどれほど喜んだかは言葉では言い尽くせません。

また人をやって近江の国主[27]の奥方であった貴人マリアを訪ねさせました。彼女はまだ信仰にとどまっていました。異教徒に囲まれながらこのように信仰を貫くことができるというのはすばらしいことです。主のみ名が褒め称えられんことを。この地のキリシタンたちの信仰はわたしの想像以上に堅固です。どうかこれらすべての者を尊い御手の内にお守り下さいますよう。アーメン。

1588年５月６日　都にて[28]

---

[22] ＜Wicki注22＞人夫、苦力、車夫のこと。

[23] ＜Wicki注23＞*Cartas* 1598 II、257vに次のような記載がある「常に輿に乗って人目に触れないよう移動しています。その際当地でのやり方に従って２人の人夫が乗物を肩に担ぎますが、担いでいる当の人夫さえわたしが中にいることを知りません」。

[24] ＜Wicki注24＞cf. *Cartas* I.c.　司祭キャンピオンの殉教など、エリザベス女王時代の迫害について触れている（cf. *Documenta Indica* XII, 818; *Synopsis historiae Societatis Jesu*, 1950, 740）。

[25] ＜Wicki注25＞これについては*Cartas* I.cでは述べられていない。

[26] ＜Wicki注26＞*Cartas* 1.c, 258vでは〈Ioão〉。チュウアンについては第２部43章参照。

[27] ＜Wicki注27＞*Cartas* I.c.ではrey（国王）でなく、館（ヤカタ）と書かれている。

[28] ＜Wicki注28＞cf.*Cartas* I.c., 257v-258v。ただしここでは日付が脱落。

P. Luís Fróis, Historia de Japam, Edição anotada por José Wicki, S.J., Vol.5, 1984

翻訳・フロイス『日本史』3部1～4章正誤表（冊子用）

電子体は修正済です

頁数	（誤）	（正）
31 左35行	リスボン国立図書館本はアジュダ図書館写本(49-IV-54)(49-IV-57)、国立図書館写本(9448)(177360)(177361)、海外史文書館写本(1659)の計6つの写本のすべてをもとに、失われた原典フロイス「日本史」により近いよう復元する校訂版で‥	リスボン国立図書館本は、アジュダ図書館写本(49-IV-54)(49-IV-57)・国立図書館写本(9448)(177360)(177361)・海外史文書館写本(1659)の計6つの写本のすべてをもとに、失われた原典―フロイス「日本史」―の復元を試みる校訂版で‥
32 左25行	‥他写本より精度の高い部分がある。他の観点からも総合的に判断して、より古い写本である‥」	‥他写本より精度の高い部分がある。他の観点から総合的に判断しても、より古い写本である‥」
32 左33行	（松田毅一氏は）「日本史」の写本のすべてについて知ってはいるようだが、国立図書館所蔵の写本（9448）についてはどう理解しているか不明だ。 としている。	（松田毅一氏は）「日本史」の写本のすべてについて知ってはいるようだが、国立図書館所蔵の写本（9448）についてはどう理解しているか不明だ とある。
33 右23行	..., porque das criansas que nascem se fazem…(18)	..., porque das crianças que nascem se fazem…(18)
33 右31行	Moraes の辞書（Antonio Moraes Silva, Diccionario da Lingua portuguesa, 1789）,borzoleta	Morais の辞書（António de Morais Silva, Diccionario da lingua portugueza, 1789）に borzoleta
34 左17行	<Wicki 注 9>（家康の息子の妻）千姫（秀忠の娘）は誤りで松田注（18）信康の妻？が正しく？は不要」	<Wicki 注 9>「（家康の息子の妻）千姫（秀忠の娘）」は誤りで、松田注（18）「信康の妻？」が正しく、「？」は不要
35 右16行	異心のないことを有馬が祭壇の前で誓ったので‥	他意のないことを有馬が祭壇の前で誓ったので‥
35 右28行	その内各1人はそのまま潜伏したのだったが、他の2人は王子の命令で山口に帰った	その内各1人はそのまま潜伏したのだったが、他の2人は王子の命令で山口に帰って来た
39 左16行	‥島原で隆信と一戦を交えたことがあります（この戦で隆信は死んだ）。	‥島原で隆信と一戦を交えたことがあります（この戦で隆信は死にました）。

39 右25行	かの地に住む異教徒たちの目を開き真の造物主について知らしめるために、主自ら照らしたまう光です。	かの地に住む異教徒たちの目を開き真の造物主について知らしめるために、主自ら照らしたまう光のことです。
39 右39行	なぜ島原の住人がキリシタンに改宗するのか納得されるだろうからです。	なぜ島原の住人がキリシタンに改宗するのかが納得されるだろうからです。
41 左22行	このように順調に教化がすすんだがたゆえ彼らの変化は、以前から彼らを知っていたものを少なからず感嘆させたほどだった。こうして神のご配慮、司祭らの熱心な活動と修道士らの熱意により、かの地にまだ見られた異教徒も次第に‥」	このように順調に教化がすすんだがゆえの彼らの変化は、以前から彼らを知っていたものを少なからず感嘆させたほどだった。こうしてデウスのご配慮、司祭らの熱心な活動と修道士らの熱意により、かの地にまだ見られた異教徒たちも次第に‥」
41 右33行	‥‥数珠も聖体袋も身につけておらず所有してもいなかったということだった	‥‥数珠も聖体袋も身につけておらず所有してもいなかったということだ
42(脚注)	<Wicki 注 14>	<Wicki 注 13>
42(脚注)	<Wicki 注 13>	<Wicki 注 14>
43 右8行	シナへジャンクが発った後、わたくしどもの滞在について殿の見解を尋ねたところ‥	シナへジャンクが発った後、わたくしどもの滞在について殿の見解を尋ねましたところ‥
44(タイトル)	フランシスコ・グレイス 1(ガルセス)が贈り物を‥	フランシスコ・グレイス(ガルセス)が贈り物を‥
52 左11行	われわれは尊きご意思に身をもってお答えする気持ちで‥	われわれは尊きご意思に身をもってお応えする気持ちで‥